
裏切りの剣

晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏切りの剣

【Nコード】

N2718X

【作者名】

晶

【あらすじ】

真選組の面々に迫る影。

泥を塗られ、探られ、命を狙われる。

渦巻く策略と陰謀。
はたして…。

プロローグ（前書き）

予告してました、真選組メインのお話です。

前ほどさくさくと更新しないかもしれせん。

気長に生ぬるゝゝ、見守っていただけるとうれしいです（笑）

では、どうぞ。

ブローグ

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

近藤勲、土方十四郎、 沖田総悟：名前は聞いたことがあるだろう？
そう。この三人が、名実共に真選組の顔だ。

これを消せば真選組の解体は容易いだろう。

まずは奴らの懐に入り込み内情を探ること…。
いいか？決して気取られるなよ。

探り、付け入り、寝首を掻け。

どんな手を使ってもいい。

奴らを…

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・
・ ・ ・
・ ・
・
・
・
・
・
・
・

――消せ。

プロローグ（後書き）

最初と最後の謎の点は文字数かせぎです…（笑）

200字ないと投稿できないんですね。

無能

どうなってやがる…。

武装警察真選組、副長の土方は、自室にて新聞記事に連日記される
“話題の二ユース”に苦い顔を向けていた。

『真選組、また！？ 攘夷浪士取り逃がす』

記事にでかでかと踊る文面は、自分たちの失態をありありと綴っている。

「あゝ。無能の副長だ」

障子の隙間からひょっこり顔を覗かせたのは、一番隊隊長、沖田だ。
相変わらず毒を吐く沖田に呆れた視線を送りながら、土方は記事から目を逸らす。

「総悟…。言つとくがてめえもだぞ？もう少し危機感持ったらどうだ」

「えゝ。俺は知りやせゝん。言われた通り現場に行ってるだけですもん」

「いつも命令になんて従わねえ奴が調子いい事言ってるじゃねえよ」

「そんな。俺はいつもどんな命令にも従うしか術^{すべ}がない従順な兵士じゃないですか」（てゆーかマジ勘弁しろよ真面目に調査しろよ土方）」

「怪しい言い方すんな！！てか最後の方向か聞こえたよ！？」

結局いつものように言い争いになったところで、もうひとつ、声が入ってきた。

「しかし事は深刻だなあ」

「近藤さん！」

ぶらぶらと廊下を歩いていたらしい局長の近藤は、言葉とは裏腹に呑気だ。

隣には監察の山崎がいる。

「いったいどうしてこんなことに…」

「山崎イゝてめえちゃんと地味に監察してるのか？お前の調査の時点でバレバレなんじゃねえの？地味しか取り柄ねえんだからちゃんとやれ愚図が」

沖田はいつの間にかだらけきつた態度で畳に寝そべり毒を吐く。
上司の前とか相手が年上とか、そんなことは全く気にしていないようだ。

だが、山崎も監察のプライドなのかさすがに怒ったように声を荒げて反論した。

「何言ってるんですか！俺は地味ですよ！いつもバリバリ地味ですよ！調査中ミントンに興じててもバレない地味さですよ！」

「真面目に働けえええ！！」

山崎の不真面目な仕事ぶりの暴露に、今度は土方が声を荒げる。

「やつばてめえのせいなんじゃないの？ねえ。てめえのミントンがバレてんじゃないの？」

「ち、違いますよ！最近我真面目にやってるし…それに、俺が調査した件以外でも取り逃がしてんじゃないですか！」

確かに、山崎の言う通りだった。

最近の任務失敗ぶりは異常だ。

コツコツと攘夷浪士たちの不正を調査して、確実に捕えられる計画を練っても、すんでのところで逃げられる。それも一度や二度ではないのだ。

明らかにイライラとして煙草に火をつける土方を横目に、沖田が大きな欠伸をする。

「あれじゃないですかイ？ある人が近付くとマヨネーズ臭がするからバレるんじゃないですか？」

「俺か！？俺のせいだってか！？」

「まあまあ。仲間内で争っても仕方ないだろう」

また喧嘩が始まりそうになったところで、近藤が止めに入る。

それに乗じて、山崎も思い出したように話し出した。

「あ、そうだ副長。三日後の黒犬一派の会合ですが、場所、割れましたよ」

「今度こそ気取られてないんだろうな？」

「…た、多分」

土方が、イライラしたままの視線を山崎に向けると、その山崎は自信なさ気に答える。

まあ、山崎を責めても仕方ない。

土方は、ふう、とため息をついた。

「まあいい。今回は逃げられても対応できるように包囲網を広く張ろう。配置説明するぞ。隊士たちを集めろ！」

「わ、分かりました！」

山崎は、鞭を打たれた馬のように勢いよく部屋を飛び出す。

これ以上失態を繰り返すわけにはいかない。

対策を練らなくては。

だらだらと寝そべる沖田と、呑気に笑う近藤を尻目に土方はひとり奥歯を噛み締めた。

年下の少年（前書き）

今回登場する少年、誰だよお前ってなるかもしれませんが、後々出てきます。

年下の少年

作戦会議を終えて沖田がぶらぶらと庭を歩いていると、向かいからひとりの少年が駆けてきた。

「あつ！沖田隊長だ〜！」

隊服に身を包んでいるから隊士なのだろうが、駆け寄ってきた少年はあまりに若い。自分と同じか、少し下くらいか。
セツトしているのか寝癖なのかよく分からないハネた髪にくりりとした両目。

長い睫毛に紅潮した頬はまるで女みたいだ。

「…誰だっけお前？」

「六番隊副隊長補佐、きさきたける貴寄猛です！最近入隊して…俺、沖田隊長に憧れてるんスよ！」

沖田が尋ねると、少年、猛はぴしつと敬礼をして、大きな目をこちらに向ける。

「ふーん。何で？」

「俺と三つしか変わらないのに…真選組一の剣の使い手だって、田舎にいたときから聞いてて。勝手に目標にしてたんス」

「つーことは十五か。」

それにしても、自分が冷めているのもあるが、随分と子どもっぽい。

無邪気にはしゃぐ猛を見ながら、沖田は薄く笑みを浮かべた。

「へえ。俺のファンならまずしなきゃならねえことがあるぜイ」

「な、何ですか？」

沖田のニヒルな笑みに、緊張がはしる。
猛はごくりと喉を鳴らす。

「そう、俺の日課の…土方殺…」

「くだらんこと吹き込むなっ!!」

恐ろしい言葉を漏らしかけた沖田を、土方のでかい声が止める。

猛は少し不思議そうな顔をするが、すぐに姿勢を正して土方に向き直った。

「副長!おはようございます」

「おー。え」と…」

元気に挨拶をする猛に、土方は少し、目を泳がせる。

多分名前を覚えていない。

知ってか知らずか、猛はまた、丁寧になを名乗った。

「六番隊副隊長補佐、貴寄猛です!」

完全に“そういえばそうだった”みたいな顔をする土方に、沖田は呆れたように嫌味を言う。

「自分が面接した奴ぐらいしつかり覚えといたらどうですかイ」

「一人で何人面接したと思ってんだ。…つってもお前は覚えてるよ。最年少天才少年だろ」

どうやら、名前以外は覚えていたらしい。

土方がそう言つと、猛は少し照れて、焦ったように言葉を返した。

「いえ！まだまだ皆さんの足元にも及ばないっス！」

「入隊前試験で学力体力共にAランクだったんだぞこいつ。おまけに謙虚ときた。目標とする奴を間違えるなよ」

今度は土方が沖田に嫌味っぽく言つと、またいがみ合いが始まる、と思つたのだが、それは間に割つてきた猛によって防がれた。

「沖田隊長もやっतんですか？入隊前試験」

「ん？あア。やったな〜そついや」

記憶が曖昧らしい沖田に代わつて、土方が答える。

「俺ら結成前からいた組は形式的にだけだな。こいつは…どつちもGランクだ」

「えっ？沖田隊長は昔っから超天才だったって…」

土方が口にした試験結果に、猛は驚きを隠せずに声をあげる。
真相を確かめようと沖田を見るも、当の本人はすました顔をしているだけだ。

猛が答えを求めるように視線を戻してくるので、土方はまた話し出した。

「確かに昔から剣の腕は良かったが…学力テストでは寝るわ体力テストでは試験官に斬りかかるわ…最悪だったね」

当時を思い出してか顔をしかめ、沖田を睨む土方だったが、沖田自身は、そーでしたかねイ、ととぼけてみせるだけだ。

そんなふたりを代わる代わる見ていた猛だったが急に、ふふつ、と声を零した。

「ふつ…あははっやっぱスゲーや沖田隊長！俺なんていい点とるだけに必死だったのに…ますますファンになりました」

「はア！？」

そんな風に笑う猛に土方が呆れたように言ったところで、渡り廊下を歩いていた六番隊の隊長、井上がこちらに向かって怒鳴り声を上げた。

「おいタケ！何やってる！仕事しろ」

「あ、はい！」

どうやらこの少年、仕事の途中で抜け出して来たらしい。
猛は土方と沖田に一礼すると、失礼します、とその場をあとにした。

「かわいい奴じゃねえですかイ」

沖田が、ニヤニヤと笑いながら言う。
きつとまた、余計なことを考えている。

そう、従順なペットを手に入れた、そんな顔。

「…あいつ入隊させたのは間違いだったかな」

命の危険が二倍になった気がして、土方は身震いしたのだった。

お互い様

「またかよ…」

対策は練った。

先行して現場に向かう隊士たちは私服、覆面パトカーで向かわせた。後から駆け付ける自分たちも普段の巡回を装い、ごくごく少数で、バラバラに現場に向かった。

…それなのに。

土方たちが到着したところには会合場所はもぬけの殻。そして…。

「副長！周辺を包囲させてた隊士たちの方でも収獲ゼロであります！」

用心して退路に張っておいた包囲網も、あっさりすり抜けられたらしい。

「…お前、どこの隊の奴だっけ？」

報告をしてきた隊士は見慣れない顔だった。この少数精鋭の中にいるのだから、それなりの地位にはいるはずだが。

「二番隊副隊長補佐、花井新太はないあらたであります！」

身の丈六尺ほどはありそうなひよろりとしたつり目の男は、身長に見合ったやたらとでかい声で名乗り、敬礼をした。

そういえば先日面接した新人にこんな奴もいたか。

土方はそう古くもない記憶を掘り起こして、ああ、と声を漏らした。

「そうか。ご苦労さん」

もう一度敬礼をして、走り去って行く隊士を見送っていると、後ろから急に声をかけられた。

「やっぱダメじゃねえですか」

沖田だ。

まるで他人事のように言う沖田に土方は、うるせえな、と返すとそのままぼつりと呟いた。

「しかし…情報が漏れてるとしか思えねえなこりゃ」

沖田の眉がぴくりと動く。

「スパイでもいるって言うんですかイ？」

「かもな」

「怪しいのは最近入隊した連中、ですか」

土方は煙草を吹かしながら、可能性としてはな、と一言、横目で沖田を見遣る。

「まア伊東の件で随分隊士も減ったし…その穴埋めで入隊した連中はあの時のごたごたで素性の調査も適当だったからな」

「だったら面接した土方さんの責任ですね」

「あんな数一人で捌ききれるかっ！それにほとんどが幕府推薦の奴らだ。入れざるをえなかったんだよっ！」

ただでさえ苛ついているのに沖田の言葉で当時の苛立ちまで思い出して、土方はいつもに増して不機嫌オーラを纏う。

当の沖田は涼しい顔をしているが、何も知らない周りの隊士たちは完全に萎縮している。

そんななか山崎は、勇敢にも土方に話しかけた。

「だ、ただ、最近では情報漏洩を避けてほとんどの隊士たちには現場に着くまで詳しい作戦内容は言っていないでしょう？」

いやに下手に出て話しかけてくる山崎の態度を見て自分の今の物凄い形相に気付いたのか、土方は、ふっと息を吐き不機嫌な態度を改めた。

「だったらかなり絞れるな。新人の中でその情報を知り得た奴を洗え」

「分かりましたア！」

心なしかいつもよりしっかりと敬礼をして、山崎は調査に駆けていく。

それを見ながら沖田が誰にともなく呟いた。

「仲間をつたぐるなんて。嫌な仕事でさア」

「仕方ねえだろ。ここまで情報だだ漏れなんだ。こっちから動かねえと寝首搔かれるぜ」

「まだ少し不機嫌だが、土方はいつもの冷静さを取り戻して言う。が……。」

「あゝ。そういえば最近よく空から植木鉢が降ってきたり車に執拗にストーキングされたりしたな」

「お前それめっちゃめっちゃ命狙われてんじゃねえか！日頃てめえに怨みを持つ誰かの犯行じゃねえの！？」

「やだなア。土方さんにとっては日常茶飯事でしょう？」

「犯人は全部お前だけだねっ！」

先程の殺伐とした空気こそないが、土方は再び声を荒げた。
だが結局、呆れたように息をついた。

「だいたいお前は…っっ！」

沖田の方を向いた土方の動きが一瞬止まる。

沖田の黒い隊服に赤い光が走り、それはちょうど胸の辺りでぴたりと止まった。

光の飛んできた方向に目をやる。そこには…。

ふいに自分の方を見たかと思っただけに深刻な顔をして背後を振り返る土方に沖田は怪訝な顔を向ける。

「どうしたんですか？土方さ…」

——危ねエ！！

沖田の体が、ドン、と弾かれる。

パン！

渴いた男がして、血しぶきが舞う。

土方は僅かに顔を歪め、う、と小さく呻いた。

「トシ！」

「副長！」

異変に気付き、近くにいた近藤と山崎が駆け寄ってくる。

「騒ぐな。掠っただけだ。それよりあそこ、長銃か何か持った奴がいるぞ！逃がすなっ！」

土方は撃たれた右腕を左の手で抑え、止血しつつ顎で正面の廃ビルを示す。

「は、はいっ！」

山崎はそのまま、踵を返して隊士たちを集め、ビルへ向かう。

近藤も心配そうにこちらを振り返りながら沖田に、ここは頼むぞ、と言つと山崎たちを追っていった。

「ちつ。痛ってーなア。骨もイったな多分…。こりゃ完全にお前、狙われてるぞ。総悟」

掠っただけ、さっきはそう言ったが、銃弾は完全に土方の右の腕を

撃ち抜いていた。

止血のために黒い上着を脱ぐと、あらわになった中の白いシャツが血に染まって真っ赤になっているのが見える。

「…余計な事、してんじゃねエよ」

突き飛ばされて腰をついたまま、沖田が目も合わせないで呟くと、土方は呆れたように鼻で笑った。

「素直に礼も言えねえのかてめえは」

土方は首に巻いたスカーフを外し、左手と口を使ってそれを傷口に巻き付け器用に止血をする。

沖田はそれを手伝うでもなく、ちらりと見てはまた目を逸らした。

「…大きなお世話だつてんだ」

「まー…お前から素直に礼が貰えるなんて思ってたがな」

止血を終えた土方は、すっと立ち上がり沖田に背を向ける。

「とりあえず身の回りには気いつける。お前はいつつも、他人は護れるが自分^{てめえ}は護れてねえからな」

そつ、言い残すと土方はそのまま行ってしまった。

廃ビルへと消えていく土方を見遣りながら、沖田がまたひとつ、呟いた。

「…お互い様だっただ。クソ野郎」

お互い様（後書き）

隊士の身長の表現で使った六尺は2メートル一歩手前くらいです。

多分…（笑）

我慢（前書き）

ちらつと主役登場（笑）

我慢

全治三週間…。

やはり骨にヒビが入っていたらしく、腕にはギプスが付けられた。

利き腕を動かせないだけでストレスが溜まるのに、前方から更にストレスの元がやって来た。

「あれ？土方君何ソレ？ついにキャラ立ちのために小道具使いだしたの？包帯キャラなの？」

やって来た銀髪は案の定自分に絡んできた。

「違えよ馬鹿」

一応は“一般市民”であるこいつらは、斬って捨てることができない分、攘夷浪士よりも厄介だ。

適当に受け流す土方だったが、今度は横のガキが絡んできた。

「ふんっ！骨折してきたからってクラスの主役になれるのは一瞬アル！私の調査では松葉杖の方が注目を集める時間が長いネ」

なぜか得意げに言う神楽の肩を、ぽん、と叩いて銀時が続ける。

「普段話し相手がいない奴が怪我見せびらかして声かけてもらおうとしてんだ。悲しいね」

「ふっ浅はかな考えアルな」

土方を馬鹿にしたように笑う万事屋^{ばか}ふたりの後ろから、一応は常識人、メガネの少年が現れた。

「そうだしたらあんたらめちゃくちゃ釣られてますけどね」

今はこいつらの相手をしている元気もない。

土方がわざとらしくため息をついてその場を去ろうとすると、銀時と神楽はその態度にイラついたらしい。眉間に思いつきりシワを作った。

「…おい、神楽。ギプスに何か卑猥な言葉書いてこい」

「イエッサー」

「くだらねえことすんな！」

さすがに飛び掛かってくる神楽を無視することはできずに、土方は観念したように立ち止まった。

「ところでこんなとこで何してんですか？」

新八が尋ねると、

「そーだよな。昼間からぶらぶらと何してんの？働けよ税金泥棒」

銀時が当然のように茶化してくる。

「“巡回”だ！てめえらと一緒にすんな！」

言っと土方は苛立ちを堪えるように目を閉じる。

あんまり顔を見ないようにしよう。いちいち腹立つ。

が、土方の努力も虚しく、銀時は“地雷”に触れた。

「今世間で話題の“無能”がア〜？」

もう怒りは爆発寸前。だが、時間の無駄、そう言い聞かせて土方は何とかもう一度堪えた。

「いや、まあいい。駄目な二トに構ってる暇はねえんだ。お前ら総悟見なかったか？」

そう。自分は今巡回がてら途中で消えた沖田を捜しているんだった。街をぶらついていたのである。つこいつらなら、遭遇しているかもしれない。

だが、その考えは新八によってあっさりと否定された。

「一緒じゃないんですか？」

だから聞いてんだよ、なんて思ったが、知らないなら用はない。また、土方が去ろうとすると…。

「またどつかでサボってんじゃねえの。“無能”らしく」

「て、め、え…っ。さらっと流したのにネチネチ絡んでくんない！姑かつ！」

堪えきれずに、ついに土方の怒りは爆発した。
そうなるとやはり、横の神楽も参戦する。

「料理全てをマヨネーズまみれにする嫁なんて文句言われても仕方ないアル」

「俺アマヨネーズに文句つける家になんて嫁がねえ」

「あれは誰でも文句つけたくなるでしょ。丹精込めて作った料理にあんなことされたらちゃぶ台ひっくり返すね」

「てめえにだけは言われたくねえ！」

三人が話の論点がずれていることも気にせず言い争っていると、不意に土方が動きを止めた。

胸ポケットの携帯が鳴ったのだ。

「もしもし。…山崎か。どうした？…あア、分かった。すぐ戻る」

用件だけの短い電話を済ますと、土方は携帯をしまった。

「てことで行くわ。じゃあな。てめえらしつかり働けよ」

そう言い残すと、土方はさっさと行ってしまふ。

そんな土方を見遣りながら、新八が小さく、あつ、と零した。

「あの傷、どーしたんですかね？」

そういえば、いじるばかりで何故怪我をしたかなんて聞いていなかった。

銀時と神楽もいま気が付いたというように顔を見合わせた。

「さあ。ドSに命狙われたとか、こけたとかそんなんだろ。どーせ」

我慢（後書き）

全治何日とかは適当です。骨折とかしたことないから知らない…（
^ ^ ;

容疑者たち

ある隊士たちの入隊時の写真つきの履歴書と山崎の調査報告書を手
に、土方が呟く。

「怪しいのは四人、か」

山崎は、はい、と言、自分も手にした資料に目を向けながら、調
査報告を始めた。

「まず一人目、花井新太。はないあらた幕府の重鎮の息子で二番隊副隊長補佐を
させてます。完全なコネ入隊ですね。入隊前試験では学力体力共に
Dランクです」

写真に映るのは、ひよろりとした長身でつり目の男。そういえば
この間、黒犬一派の会合に乗り込もうとした現場で見つけたか。

土方は、山崎の調べた詳しい経歴をざっと見ると、次、と続きを促
した。

「はい。二人目、一色隆太郎。いっしきりゅうたろう五番隊書記。天皇一家の遠縁の出ら
しいです。彼は学力B、体力Cランク」

色白で面長、切れ長の目は男に使っていいのかは分らないが“京
美人”といった雰囲気だ。

柔らかく笑っているが、心の奥では何を考えているのか分らない、
そんな表情。

次。

「三人目、貴寄猛。きさきたける彼はまだ十五です。六番隊副隊長補佐で、五人の中で彼だけは一般家庭の出で…副長たちと同じ武州出身です。学力体力共にAランク」

長い睫毛にあちこちはねた髪。写真の少年は懐っこい笑顔を浮かべている。

先日、沖田のファンだと言っていたちびっこだ。

次。

「最後、四人目は、瀬戸准平。せとじゅんぺい五番隊の一隊士ですが、隊長の武田さんと飲み友達らしくて…武田隊長、飲むと口が軽いでしょ？もしかしたらって。彼の母親は大阪の豪商、父親は法務省のお偉いさんだとかで家族ぐるみで中央と深い繋がりを持つとか。ちなみに瀬戸は母親姓。父親は婿養子ですね。学力D体力Bランクです」

武田か…。腕は確かだから隊長に据えているが、山崎の言うように少々口が軽い。

写真の男は、ド派手な金髪をハーファップにした、口の上手そうないかにも関西の商人の息子、といった感じだ。

「身分的にはこいつが一番怪しいな」

簡単な報告が終わり土方が呟くと、山崎は資料から目を離し、土方を見た。

「どうしましょう」

「とりあえずこのことは内密にして動向を探れ。ただ真選組おれたちを貶めたいだけの愉快犯か、組織ぐるみで真選組おれたちを潰そうとしてるのか分からない以上…派手な動きはできねえだろ」

「でも…商人や天人は散々邪魔してるんで分かりますけど、皇室に睨まれる覚えはないし…。それに中央にとっちゃ俺たちは自軍の手駒でしょう？それが俺たちを潰そうとしてるっていうのは…」

「阿呆。幕府は勝手ばかりする俺たちを常に疎ましがってるよ。皇室はそもそも幕府を嫌ってるだろっ」

命じられた調査とはいえ仲間を疑うのだ。
バレたら隊士たちの信用を失うことはおろか、彼らの“お家元”からも睨まれるだろう。

そして、その仕事をするのは自分…。

山崎はあからさまに情けない顔をしてため息をついた。

「また危ない仕事か…やだな」

「それが監察てめえの仕事だろ」

五番隊

土方が山崎に極秘調査を命じたちようどその頃、五番隊隊舎では、調査対象にあがっていた隊士がひとり、渡り廊下をふらりと歩きながら電話を耳元に寄せる。

『隆、どうや？真選組は』

「なかなか面白いですよ。少し芋臭いですが」

男の物腰は柔らかい。が、言葉の端々には何となく刺があるようにも感じる。

『はっはっは。仕方ないやろ。田舎侍の集まりやさかいにな』

電話の相手は女らしい。

女の話というのはすぐに逸れるものだ。

男はにこやかに、しかし迷惑ささえ感じさせるような声色で言った。

「何の、ご用ですか？」

電話の向こうで女は相変わらぬ男の態度を、ふん、と鼻で笑い、言う。

『…わらわの言ったこと、覚えたはりますな？』

「ええ。確かに。お役目は果たしましょう」

『それやったらええねや』

女はただ、釘をさしたかっただけらしい。それだけ言つと満足そうに電話を切ってしまった。

男は、ツー、という携帯の終話音を聞きながらため息をつく。

と、廊下の向こうから厄介な金髪男が現れた。

「いつし〜きく〜ん、誰と電話してたん？」

同じ隊で同期だからか、この金髪頭、瀬戸准平は普段からやたらと自分に話しかけてきた。

正直面倒だったが、それでも男、一色隆太郎は、にこやかに答える。

「…故郷の叔母ですよ」

「故郷か。京都やつけ？」

瀬戸は故郷を思つてか、少し懐かしそうに笑うと、こちらに問い掛ける。

どうやらここでも脈絡のない会話をしなくてはならないらしい。一色はこっそりため息をついて、言った。

「そうですよ。瀬戸君は大阪でしたか」

「せやで。てか一色くん、何で関西弁使わへんの？同じ関西勢同士、故郷の言葉を広げようや」

一色は多少のイントネーションは乱れるが、標準語を使う。
つまりところ瀬戸はこれが気に入くないらしい。

「僕は生まれは京都ですが…江戸（いづこ）に来てからも長いですからね」

「ふうん…」

しばし、会話が途切れる。一色は瀬戸に目的地を思い出させてやることにした。

「ところで“それ”は？」

瀬戸の手のなかにあった酒瓶を指摘したのだ。

「あ、せやった！隊長にパシられてたんや」

瀬戸が焦ったように言うのとちょうど同じくして、五番隊隊長の武田が赤い顔で部屋から顔を覗かせた。

「じゅ〜んぺー！！」

「すぐ行きます〜！！」

目つきと声から見て武田は相当酔っているらしい。
よく見ると瀬戸もほんのり顔が赤い。

「こんな時間から酒ですか？」

まだ夕食前、日も落ちきっていないというのに…。

一色が笑顔ながら少々呆れたように言うと、瀬戸も呆れ顔を返した。

「そ。うちの隊長、よお飲むねや」。付き合うのも大変やわ」

「ほどほどになさいね」

「お。ほなな」

話もちょうど終わったところでもう一度武田の声がして、瀬戸は急いで駆けていった。

「すみません。お待たせしました」

武田は、おせえよ、と瀬戸の手から酒瓶を引ったくり、すっかり座った目で瀬戸に問いかけた。

「お前、一色と同期だったか？仲いいの？」

「ああ、ハイ。仲ええつちゅーか…同じ関西出身やし…？」

瀬戸の答えははっきりしないから、多分こいつが一方的に絡んでい

るんだろう。

聞いた方がいいがさほど興味がなかったのか、武田は、ふん、と軽く返すと瀬戸を自分の前に座らせた。

「まあ、そんなことはいい。飲むぞー!!」

「はい」

カチン、とおちょこを鳴らすと、長い長い晩酌の時間が始まった。

五番隊（後書き）

武田さんがどんな人か分かんないですが、
実在した武田さんはお喋りな人だったみたいなのでそうしました。

原作でも出たことありましたっけ…？

悪い知らせ

「夜の巡回増えたよな」

夜の街、ぶらぶらと巡回業務にあたるふたりの隊士のうち、ひとりが愚痴を零す。

「副長だよ。最近いつつも敵に逃げられるだろ？結構上からお叱り受けてるみたいだよ」

そう。ここ数日、土方の命で隊士たちは日夜巡回に駆り出された。今までもしていなかった訳ではないが、最近は巡回に出る数も、時間も増やされている。

「まあさすがにこんだけ失態が続くとな」

「だよな」

隊士たちが気の抜けた顔で談笑しながらだと歩いている、と……。

「なあにだべってんだ？あア？」

「ふ、ふふ副長！」

「す、すみません!!」

近頃、隊士たちはすっかり弛んでいた。

伊東の件から大きな事件もなく—というか事件になる前に逃げられるのだが—小競り合いはあってもある程度の平和が続いていたからだろうか。

これなら、無能と言われても仕方がない。

土方はため息をついて眉間を抑えた。

「まったく…散歩じゃねえんだぞ…。ところでお前ら、総悟見なかったか？」

そういえば、土方の巡回のペアは沖田だったはず。

「えっ？また逃げられ…じゃなくてはぐれたんスか？」

沖田が勝手に消えるのはいつものこと。だからつい口を滑らせかけたこの隊士は自分の言葉を慌てて訂正した。

「…見てねえならいい。さっさと仕事戻れ」

土方はとりあえず聞き流してくれたらしい。

ふたりの隊士は安堵して、はい！と敬礼をして持ち場に戻った。

「総悟の奴…どこ行きやがった」

―・―・―・―・

巡回中、近藤がペアの隊士と缶コーヒー片手にしばし中休みをとっている、正面の路地を見慣れた栗毛が横切った。

ペアの隊士を待たせ追いかけると思った通り、沖田がひとり歩いていた。

「総悟？何してるんだ？確かトシと巡回じゃなかったか」

近藤に気付いた沖田は少しばつが悪そうな顔を見ると、目を逸らし呟いた。

「…はぐれちまったんでさア」

「そうか？じゃあ電話して…」「いいです」「」

今の時代は便利だ。はぐれたって、ボタン数プッシュでお互いの位置を確認できる。

そう思い懷から携帯を取り出した近藤の手を沖田が止める。

「…？どうした」

「何で最近ヤローとばかりペアなんですか。他の奴らはちゃんとローテーションでしょ」

沖田はまるで拗ねた子どものように眉を寄せて言う。確かに元々行動を共にすることが多かったが、最近は特にそれが顕著だ。恐らく、意図的なものだろう。

土方からその意図は聞いているであろう近藤はあからさまに困った態度でしどろもどろに答えた。

「それはその…お前の事が好きなんじゃないか？」

「気色悪いこと言わねえで下せえ」

返事に困ったらしい近藤はそのまま沖田に尋ね返す。

「お前こそ…最近いつも俺たちを避けてやしないか？単独行動ばかりして」

沖田の眉がほんの少し、ぴくりと微かに動く。

「俺アいつもこんな感じですよ」

「違うな」

近藤は、先程とは違ってかわって真剣な顔で沖田を見遣る。

「何が…」

沖田が言いかけたとき、近藤の手の平の携帯が鳴った。

「はい。ん？ザキか。…おい、落ち着いて話せ！」

電話の向こうの山崎は相当慌てているらしい。

傍にいる沖田には内容は聞こえないが、電話越しに漏れる声からあちら側の緊迫した状況が伝わってくる。

「何！？トシが！？」

近藤の口から、今はあまり聞きたくなかった名前が飛び出す。

近藤の表情がみるみる固くなる…。

土方^{ヤロー}に何かあった。

近藤が電話を切るのを待ちきれず、沖田は横から問いかける。

「どうしたんです？」

近藤は電話に耳を当てたまま、青い顔でこちらを向いた。

「トシが…やられた!」

ど根性（前書き）

戦闘シーンは苦手です…。

ど根性

やられた…。

怪しい奴を見つけて後を追ったら、これだ。

最近敵に逃げられてばかりで躍起になっていたからかもしれない。

これ以上真選組に、近藤さんに泥を塗るわけにはいかない、そんな気持ちからだったのかもしれない。

こんな簡単な罠にかかるとは。

とある港の倉庫街…このドンパチにはうってつけの場所で、気が付くと土方は数十人の浪士たちに囲まれていた。

単独行動中は敵を見つけても深追いはするな…。いつも部下には言ってきたことだ。

まさか自分への教訓になるなんてな。

土方は、ふつと自嘲ぎみに笑った。

「何が可笑しい？」

危機的状況にもかかわらず笑みを浮かべる土方に、取り囲む浪士たちは怪訝な顔を向ける。

「別に？そつちから来てくれるなんざ好都合だと思ったただけだ。…全員まとめてブタ箱送りにしてやるよ」

浪士たちは一瞬目を丸くした後、馬鹿にしたようにげらげらと笑いだした。

「ぎやはは！手負いのくせにこの人数に一人で挑む気がア！？お笑いだぜ！」

「たった一人に倒されて笑い者になんのはてめえらだ（やつべえええ！携帯忘れたアアア！！）」

何言ってるの？俺、なんて思いながらも携帯れんらくしゅだんを持たない土方は刀を構えるしかない。邪魔なギプスを放り投げて左手に刀を持つ。

それを確認して、周りの男たちも一斉に刀を構えた。

「たたみかける！」

「ふん。手間が省けるぜ（あー。ヤベーなこりや死ぬかも）」

土方の心の声なんて知るよしもない浪士たちは、一斉に斬りかかってくる。

ガキイイン！！

耳をつんざく金属音がしたかと思うと、ゴミくずのように数人の男が吹っ飛んだ。

「何だ。腕はたいしたことねえな」

ゴミくずたちの中心で、土方が笑う。

これなら…。

なんとか蹴散らせる、そう思い始めた時、パン、と音がして黒い弾が土方の右頬を掠めた。

「銃弾！？またかよっ！！」

周囲を見回すと、幾人かの浪士たちが刀を捨て、代わりに短銃を構えている。

「ちっ…侍なら刀で勝負しろってんだ」

苛立ちぎみに言う土方だったが、自分を取り囲む連中はたった一人に数十人で向かってくる奴らだ。そもそも土道なんて持ち合わせてはいないだろう。

銃弾を刀で弾き、そのまま器用に体をねじって斬りかかってくる浪士をいなす。

浪士たちは卑怯者らしく土方の痛んだ右側ばかりを狙ってくる。

自分の右側、振り下ろされる刀の柄つかごと浪士の手を掴んで引っ張り倒す。

そこまではよかった。
が…。

「…っつー!」

浪士を引っ張った衝撃で、撃たれた右腕に痛みが走って土方は一瞬だけ、集中を途切れさせてしまった。

これがいけなかった。
動きを止めようと土方の足を狙って飛んでくる弾丸を、ギリギリのところまで避け損なう。

左の足に衝撃が走り、土方は、ぐ、と唸って膝をついた。

「今だ！かれ！」

ここぞとばかりに浪士たちは一斉に飛び掛ってくる。

こんな単純な罠にかかって死ぬなんぞ、それこそ真選組副長の名折れだ。

傷は痛い。戦局は不利。

だけど引く訳にはいかない。

泥臭い田舎侍の、ど根性ってヤツを見せてやるっじゃねえか。

土方は痛みに堪え、左手の刀をぐっと握った。

――

気が付くと辺りは血の海。

ぜえぜえと肩で息をして、意地だけでそこに意識を留めている、そんな感じだ。

血だまりの中に立つ自分はきつと酷い顔をしているだろう。

「化け物だ…」

血だらけでゆらりゆらりと揺れながらもこちらを睨みつける土方に、生き残った浪士のひとりが呟いた。

土方から発される気迫は、まばらに残る浪士たちにこれ以上の攻撃を憚はばらせた。

男のうち数人が、ひ、と後ずさる。

「じ、冗談じゃねえ!!」

「金より命だ!!」

ひとりの浪士がその場を逃げ出すと、他の浪士たちも一斉に逃げていく。

もう動くものはなくなったそこで、土方はどさりと崩れ落ちた。

素直じゃない

病院の薄暗い廊下。

ぼうつと灯る手術中のランプは、電気が切れかかっているのか頼りなげに光を放っている。

山崎から知らせを受けて駆け付けた近藤は、このランプを見ながら、そわそわと立ったり座ったりを繰り返している。

傍らには同じく心配そうに立つ山崎と、落ち着いた様子で、だが苦痛とも取れるような苦い表情を浮かべた沖田が座っている。

と、ランプが消えて重厚感ある扉が開いた。

「あの、トシは…」

扉から現れた医師に、近藤が一番に駆け寄る。

「大丈夫。一命は取り留めました。うまく体を庇ったんでしょう。後遺症の残る可能性もほぼないかと」

マスクを取った医師の上がった口角を見て、近藤はやっと安堵の息をついた。

続いて手術室から現れたストレッチャーに駆け寄ろうとすると、明日には面会できますよ、と医師にとめられてしまった。

「ありがとうございましたっ」

近藤、そして山崎は医師に礼を言つと、ようやく椅子に腰を落ち着かせた。

「はあ。お前から連絡受けたときは心臓が止まるかと思つたぞ。まるでトシが死んだみたいに言うから」

落ち着きを取り戻した近藤が、山崎をからかうように言う。

「いや、あれはビビりますって！！副長、血だらけでぴくりとも動かなかつたんですから！ホントもうちょっと発見が遅かつたらヤバかつたですね…」

自分がかなり動転していたのを思い起こして、山崎は照れ笑いを浮かべながら言い訳するように返した。

「なんにしても助かってよかった」

近藤がいつもの笑顔を向けると、山崎も緊張の緩んだ顔で、はい、

と答えた。

「でもまあ…片腕で、しかも一人でよくあんな大量の攘夷浪士を…
やっぱ恐ろしい人ですね」

副長の携帯が繋がらない、そう思って仕方なく周辺を捜し回っていた山崎が目にしたのは、自分が捜していた人物が血だらけで横たわる姿だった。

周辺には同じく血だらけでそこらに転がる大量の浪人衆。

浪士の中には苦しげに呻く連中もいたが、中央の土方はピクリとも動かずにそこにいた。

あまりの光景に気が動転して、山崎は救急車を呼ぶのも忘れて近藤に電話をかけていたのだ。

「あ、すみません。ちょっと入院の手続きとかしてきます」

「ん？ああ、悪いな」

山崎は急に思い出したように言うと、病院の暗い廊下の先に消えていった。

「総悟、とりあえず今日は帰るぞ」

近藤は再度、ふう、と息をつく、隣でやけに大人しく座る沖田に声をかける。

「…総悟？」

黙ったままの沖田に、近藤が不思議そうに問いかける。

「…俺のせい、ですよ」

しばらく黙っていた沖田にもう一度声をかけようとした時、その沖田がぽつりと呟いた。

「ん？」

「片腕の土方さんを一人にしやした…」

視線を落としこちらを見ない沖田に、近藤は、こいつは全く、と少し呆れたように笑った。

「…トシにも責任はあるさ。手負いでぶらついて…あいつはもーちよっと普段からいろんな奴に怨みをかけてる事を自覚しねえとな」

沖田は一瞬、驚いたように大きな目で近藤を見ると、またすぐその目を逸らす。

「…近藤さんもいろいろ標的にされてるでしょ」

「ははっ。お前もな。名が売ればしょうがねえよ。…今回の事だつて自分が狙われてるから…トシがお前を庇って撃たれたから…これ以上巻き込まないために、俺たちを避けてたんだろう？」

沖田の単独行動の理由^{わけ}…。

近藤はとうに気が付いていたらしい。
と、いうことは当然土方も…。

「…土方さんは…俺が狙われてるから俺とばかりペア組みたがったんでしょ」

「そうだな」

「片腕のくせに…他人護ろうなんざ、馬鹿ですよ」

「…そうだな」

普段命を狙っている自分を助けるために躍起になるなんて、馬鹿な人だ。

そんな馬鹿を巻き込まないように避けていたのに。

「そういつとこが…嫌いです」

お互いを気にかけてはいるくせにいつもいがみ合う。

近藤は素直じゃないふたりに、やれやれ、と苦笑いを浮かべたのだ
った。

目覚め

死んだ、と、思った。

この意識はどこにあるのだろう。ひょっとして、あの世にも行く途中なのか。

ぼんやりそんな事を考えていると、ふいに激痛に襲われて、土方は目を醒ました。

どうやらまだ死んではいなかったらしい。

痛む体を無理矢理起こして辺りを見回すと、ここが病院であることが分かった。

自分に起こったことを思い出そうとしばらくぼんやりしていると、病室の入口から賑やかな声が飛んできた。

「おお、トシ！目を醒ましたか！」

「近藤さん」

近藤はにこにこ笑ってこちらに近付くと、手にした大きなカゴをベツドの傍らの棚に載せた。

「これ、みんなから。見舞いだ」

カゴの中には溢れんばかりのマヨネーズ。

「こつちの特大業務用が俺、明太子入りが総悟、カロリーハーフが…」

「あ、いや…もういい。サンキュ」

確かにマヨネーズは好きだが見舞いの品が僅か数百円ってどうなんだろう。

土方が複雑な思いでカゴを見つめているのを特に気にも止めずに、近藤は話し出した。

「傷はどうだ？」

「大分落ち着いてるが…しばらくは使い物になりそうもねえな」

記憶はないが、自分は随分眠っていたらしい。あちこちにある傷は、まだ痛むが薄い皮で塞がっているらしかった。

だがやはり、まだ戦うどころか自由に動き回るのもキツそうだ。

話しているうちに傷の経緯を思い出して、土方は申し訳なさそうに

呟いた。

「…悪い。馬鹿なことして迷惑かける」

「いや、お前のおかげで久しぶりに浪人を大量検挙できた。でもまあ、動かねえでできる仕事はやってもらうぞ。今まで任せつきりだったから全然わからん」

そう言うと近藤はどこからか出てきた大量の書類を土方の目の前、備え付けの机にどさつと積み上げた。

土方は思わず顔を引きつらせる。

それもそのはず、積み上げられた書類は本当に大量だった。

その容赦のない量は土方に、本当は単独行動のこと怒ってんじゃないの？、と思わせるほどのもの…。

「…そっいゃ、総悟は？」

土方は書類から目を背けて近藤に尋ねる。

自分がこのザマだが、確か沖田も狙われていた。

心配しているのか探るように尋ねてくる土方に、近藤は、安心しろ、と二カつと笑った。

「今日は非番だから屯所で寝てるよ。一緒に来いって言ったんだがな。相変わらず単独行動しようとするから、巡回は俺とペアだ」

「そうか。だったら大丈夫だな」

土方が、ふつと一息ついたところで、また騒がしい声がひとつ、部屋に入ってきた。

「副長！ お見舞いきましたー！」

「山崎か」

部屋に入るなり、山崎は近藤の方を向いた。

「あ、局長。とっつあんが電話繋がらないってキレてますー」

「ま、まじで？ 病院だから電源切ってたんだ。ちょっと電話してる！」

そう言うと近藤は、焦った様子で部屋を出て行った。

出て行く近藤を目ただけで見送ると、山崎はポケットから取り出したあるモノを土方に手渡した。

「はい副長。お見舞いです」

黒ごまマヨネーズ…。
またマニアックな…。

「…サンキュ」

またも微妙な顔をする土方だったが山崎は気付かずに、報告を、とガサガサ懷を探ってメモを取り出した。

「副長を襲った浪士たちですが…特にどこの派閥の者つてのではありません。生き残った奴に尋問しても、知らない男に金で雇われた、の一点張りです…」

「そついや言つてたな。金より命、とか」

それに、と土方は付け足す。

「奴ら、結構いい武器使つてやがつたな…ありやそんじよそこらのモンが用意できる代物じゃないぜ」

「それです。現場に残された銃の型を調べたんですが…市場ではお目にかかれない高価なもの…それこそ幕府か朝廷か、力のある役人、商人にしか手に入らないような…」

土方は考えるように目を細め、ふん、と鼻で笑う。

「いよいよあの四人が怪しいな。調査は進んでるのか」

「そうですね…明日からちよつと西へ行こうかと」

「京都に大阪、か」

京都は一色の、大阪は瀬戸の故郷だ。

土方の問いに山崎は、こくり、と頷いて話し続ける。

「今日はこれから元入国管理局の局長と話をします」

「そーか。頼んだぞ」

「はい。それじゃ、お大事に」

土方が、おう、と短く返すのを見届けて、山崎は踵を返す。

「山崎」

なぜだか土方に呼び止められて、山崎は立ち止まり振り返る。

「はい？」

「サンキュな」

突然のお礼に、なんだっけ？と一瞬考える。調査は仕事だし、この

人はいつも^{おかしな}勞いの言葉なんてくれない。マヨネーズのお礼はもらっ
たし…。

ああ、今回助けたことが。

やっと訳が分かって、山崎は、ニツと笑った。

「…いーえっ」

――。――。――。

「局長、副長に護衛付けた方がよくないですか？」

「ん？」

病院からの帰り道、山崎は電話で松平に怒鳴られてヘトヘトになっ
ていた近藤と合流し、話しかけた。

「今回の件：明らかに副長狙われてたでしょ。武器も場所も事前に
しっかり用意されてたし…。それに尋問した浪士たちが言ったん
です。『副長を殺せ』と言われたって」

さつきは怪我人を気遣って一応ふせておいたが、自分が狙われている事実は土方自身も薄々感づいているだろう。

近藤も護衛には賛成だが、ううん、と唸る。

「そつだなあ…だがあいつ、素直に護衛なんか付けるかな」

そんなことに隊士を割くくらいなら仕事しろ、土方ならそつ言つだろつ。

山崎も少し考えて、やがて、あ、と声をあげた。

「そつだ。隊士に怪我したフリさせて入院させましようか」

「そりゃあいい！敵の目も欺ける」

近藤も山崎の案に賛成する。

そつと決まればさつそく準備を、そう思ったが、山崎は言いづらそうに近藤を見た。

「ただ俺、これからちよつとやることが…」

「そつか？じゃあ俺が手配しよう」

近藤はいともあっさりこの雑務を引き受ける。

組織のトップに雑用を振るのもどうかと思ったが、山崎は、すいません、と一言残すと仕事へと向かった。

元入国管理局局長

「おかしいな…この辺りにいるって聞いたんだけど…」

近藤と別れた後、山崎は公園に来ていた。

公園のある一角には、何と言うか…世捨て人たちのダンボールの家がある。

次々とその“家”をめくつてく山崎だが、目当ての人物どころか人の姿すら見つけられない。

「いないなあ…こつちもない…」

さすがにこんな小さな箱にはいないだろう。そう思いつつめくりあげた何個目かのみかん箱。

箱いっぱい詰まった中の人物と目が合う。
ぐるぐる眼鏡の、ムサシっぽい人…。

「……………」
「……………」

そつとみかん箱のフタを下ろす。

何にも見なかった。うん。

「…いないなあ」

山崎が再びダンボールめくりに戻ると、後ろから声をかけられた。

「ジミー君何してんの？」

振り返った先にいたのは哀れんだような目を向ける…

「だ、旦那っ！」

「何か君も…大変だね。頑張って」

ちよつと焦った様子の山崎を見て、何も見てないからね、とそのまま立ち去ろうとする銀時に、山崎はさらに焦ったように返す。

「いやちよつと待って！何に！？何に頑張れって？」

「えっ…ダンボールハウス作り？仕事クビになって路上生活デビューなんでしょ？」

「違いますよっ！人捜しです！！…そう旦那、あの人も知り合いましたよね」

この銀髪と今回の捜し人は、どういう繋がりか知らないがたまに一緒にいるところを見かける。

丁度いい。事情は隠して居所だけ聞き出そう。

「ん？誰？」

「長谷川泰三さん」

そう、元入国管理局局長で、信じられないが今は無職家なしの、だ。

意外な名前に、銀時は不思議そうな表情を浮かべた後、何かを悟ったように生暖かい視線を山崎に向けた。

「長谷川さん？何だ。やっぱダンボールハウス作り教えてもらうんじゃない」

「違いますって！ちょっと入国管理局時代の話を…っとっ！」

しまった…！

山崎は滑らせた口を急いで塞ぐも、もう遅い。銀時はニヤリと、意地悪な笑みを浮かべた。

「…何？何か面白そうな話じゃん」

「い、いやいやいや…何でもないっ！何でもないですからっ！！」

焦る山崎に、銀時はさらに意地悪くニヤニヤと笑う。

「えゝ？別にいいけど。でも長谷川さん、すっげ分かりにくいとこにいるんだけどなゝ。ウォー・ーばりに見つからないんだけどなあ」

「ウォ、ウ・ーリー…」

「そうだよ。もう『ウォー・ーをさがせ』の鍵くらい見つからないよ。久しぶりに探してやろうと思ったのに全ての鍵に赤ペンで丸がつけられてた時の絶望感…昔の俺馬鹿っ！！」

「何の話ですか」

山崎が冷静さを取り戻して突っ込むと、銀時も、とにかく、と一息ついた。

「まあ見つけないの大変だから。頑張つて。ちょっと銀さんウ・ーリー探したくなってきた」

じゃーねゝ、と手を振りどんどん小さくなっていく銀時の後ろ姿…。

これは極秘任務…。

でも、今日中にカタを付けたいしウォー・ーなんて探している暇はない…。

「あ、あの…旦那っ」

銀時は、ニヤリと笑って振り返る。

「…なに〜?」

「誰にも言わないでくださいね…?」

――。――。――。

監察として、秘密は守ってきたはずだ。
でもなぜかいつもこの男相手には、なんかかんやで話してしまう。

ベンチに腰掛けたため息をつく山崎の横で、ふてぶてしく座った銀時は、ふん、と唸った。

「成る程。スパイね〜。それであんなケガしてたんだ。おたくの副長さん」

山崎は、そうですね、と軽く相槌をうち、本題に入る。
話したからにはさっさと長谷川の居場所を教えてもらわなくては。

「で、どこにいるんですか？長谷が…」

山崎が尋ねようとした丁度その時…。

「あれエゝ？銀さん。何してんの？俺ん家で」

やって来た声に名前を呼ばれた銀時はもちろん、山崎も顔を向ける。

そこには、なかなか見つからないはずの捜し人が立っていた。

「長谷川さんこそ何してたのゝ？またパチンコ？」

「聞いてよゝまた負けちゃってさ」

銀時は長谷川に気付くと、特に悪びれる様子もなく談笑しはじめた。

「えっ…？あの…長谷川、さん？」

自分が騙されていた事実を確認するように、山崎が遠慮がちに声をかける。

すると、長谷川の表情がみるみる変わった。

「うわっ真選組っ！警察が俺の家に何の用だああ！俺は立ち退いてやらないからねっ！！」

最近、迷惑防止条例とか公園の管理者からの要請で、ホームレスがダンボール家を撤去される例がよく見受けられる。

長谷川は、山崎の訪問がその類のものだと思ったのだろう。

山崎は、違う、と否定しようとするも、完全に勘違いした長谷川は山崎に向かって石やら雑草やらを拾って投げつけはじめた。

「いやっ！！違っっ！！ちよっ…旦那！」

説明をする隙も与えてもらえず、山崎は事情を知る銀時に助けを求めるが、銀時は自分だけ安全な位置でニヤニヤ笑っているだけ。

結局攻撃が止んで話ができたのは、長谷川が疲れた数分後のことだった。

元入国管理局局長（後書き）

『ウォー・ーをさがせ』ってまだあるのかな。

ちっちゃい時よくやりました。あいつ、赤と白のしましまとかいう奇抜な格好してるくせになかなか見つからないんですね…。

そんな訳で次回も『ウォー・ーをさがせ』をよろしくっ！
↑違う）
笑）

噂

「何だ。それならそうと言ってくれよオ」

「いや、言う隙が…まあいいや」

物を投げつけられて数分、やっと落ち着いた長谷川に話を聞きたいだけだ、と伝えて酒と煙草を持たせた。

それでもはじめは疑っていた長谷川だったが、やっときた銀時の助け舟もあって、ようやくと威嚇を解いた。

「瀬戸？あゝ…法務省の瀬戸誠十郎か…」

問題の四人の隊士のうちのひとり、瀬戸准平。

元入国管理局の局長である長谷川は、やはり准平の父親、誠十郎と顔見知りのようだった。

だが、長谷川は、ううん、と眉を寄せる。

「確かに入国管理局は法務省の管轄だけど…俺は局長つつつてもただのコネ入社ですぐクビになったからな。ハツの親父さんに連れられて行った食事会で一回会った程度だわ」

なんだ…。

山崎が明らかにがっかりしたように肩を落とす。

もらった酒と煙草を見遣り、さすがに申し訳なさそうに長谷川が、でも、と呟いた。

「噂程度でいいなら…。一部局内で流れていたもんだけど」

「噂？」

完全にやる気を失っていた山崎の瞳に、光が戻る。

それを確認して、長谷川はまた話し出した。

「奥さんの実家が商売人だろ？やっぱ幕府重鎮とか金持ちの天人は大切なお客様なわけだな。

だから、瀬戸は自らの権限を使って密輸品見逃したり密入国斡旋したりして自分たちの利益を上げてる…って噂だ。

まあ、確証はないがあながちただの噂でもないと思うぜ。央国星のあの馬鹿皇子がいい例だろ？」

馬鹿皇子改めハタ皇子…。

あの皇子が持ち込むえいりあんは毎回この星で問題を起こす。

長谷川にとっては人生転落の原因。

銀時も、巻き込まれた幾度かの嫌な記憶を思い出して顔をしかめた。

「あゝ… ありや完全に入国審査に引つ掛かってしかるべきだよな」

「そんなこんなで不正を取り締まる警察組織とは当然仲悪いわけだ。最近では表面化されねえが昔は瀬戸と松平つつたら犬猿の仲で有名だったし」

「とつつぁんと…？」

思わぬところで思わぬ名前が飛び出して、山崎が声を上げる。

長谷川は、そうそう、と二、三度頷くと付け足した。

「なんか同期らしいよ。あのふたり」

ばっちり詳しい事情まで聞いていた銀時が、ふうん、と鼻を鳴らす。

「こりゃあ… 立派な動機じゃねえか」

「そうですね…。調べる価値はありそうだ…。ありがとございませう。長谷川さん」

山崎は顎に手を当てて少し考えると、顔を上げて長谷川に礼を言った。

「いいつてことよ」

出会い頭とは打って変わっておおらかに笑う長谷川に、銀時が何となく面白くなさそうに呟いた。

「何か…初めて役に立ったんじゃない？」

「初めて！？そんなこと…っ！！…あるか？」

まあ、そうか？と首を傾げる長谷川に、銀時は、ちっ、と舌打ちした。

「主役の俺でさえちゃんと出てないのに何か腹立つ」

「まあ今回べつに何をするのもなく土方さんと山崎さんに絡んで無理矢理登場してるだけですもんね」

「うおっ新八っ！お前いたのかっ」

突然乱入してきた声に銀時が大袈裟に驚く。
そういえば、話している最中、キラッキラ眼鏡の反射光があったよ
うな。

新八は少し不機嫌そうに言う。

「いますよずっと。ちなみに神樂ちゃんもあつちで定春と遊んでます」

新八の指す方には、公園できゃっきゃと遊ぶ神樂と定春…。
そうだ。暇だから定春の散歩に来たんだった。

「小説だと台詞がなきゃ抹殺されたも同然だから…。仕方ない。
これからもその回のメインっぽい奴に絡みまくるか」

あまりにがつついて登場しようとする銀時に、山崎は、この人とても主役とは思えないな、とこっそり思ったのだった。

疑惑

ぶらりぶらり、栗毛で整った顔の青年が街を歩く。

いつもはかつちりとした黒い隊服に身を包み、一小隊の長なんてしている彼だったが、今日は非番らしくラフな群青の着物に刀、といったシンプルな出で立ちだ。

青年は、何かを感じるのか時折立ち止まり、ぼんやりしてはまた歩きます。

それを何度か繰り返した後、さて、と呟き人気のない路地裏に消えた。

——見られている…。

沖田が始めにそう感じたのは、屯所から出て二、三分ほど歩いたところ、そんな時だった。

索敵能力には自信があるのに、向けられる殺気の出所がイマイチよく分からない。

と言つか、殺気が現れたり消えたりしているのだ。

——ちょっと確かめてみるか…。

沖田は背後を少し気にしながら、大通りを外れ路地裏に入っていた。

「暗殺にはもってこいのとこまで来てやったぜイ。何の用でイ」

腰の刀に手をかけ、挑発するように言う。

土方のことがあったところだ。若干の緊張はあるが、感じる殺気はそれ程強いものでもないし、まず気付かれている時点で大した使い手ではないだろう。

路地の入口、何かが動いた。

「こねえならこつちから…」

沖田が一步、踏み出したところで入口のそれが姿を現した。

「は、はは…バレちゃった」

ぴよこり、と顔を出したハネた髪。身を包む黒い制服は、自分がいっつも着ているものと同様だ。

困ったように笑う少年の長い睫毛が揺れる。

「お前…」

現れたのは確かつい数日前、突然話しかけてきた少年だ。名は…貴寄猛、といったか。

「なんだって俺の後なんかつけてやがる」

沖田が、怪訝そうな目つきで猛を睨む。

「ええと俺、沖田隊長のファンですから」

それはこの間聞いた。でも、そんなこと理由にならない。問いかけにしどもどろ答える猛に、沖田は語気を強める。

「男にストーカーされるたア…いい気分じゃねえな。場合によっちゃあ…」

視線は猛を睨んだまま腰の刀を握り直す沖田を見て、猛はわたわたと慌てだす。

「ま、待って下さい！これには事情が…」

「事情？」

「ええと…」

猛がまた言いにくそうに口ごもると、沖田は、ふ、と息を吐いて刀を抜いた。

「わぁ！言いますよ！」

自分も“武装警察”の一員。当然刀は持っているが、真選組一の剣の腕を持つこの人に自分なんか敵う訳がない。

猛は、観念したように話し出した。

「最近、沖田隊長が狙われてるって聞いて…しかも副長もあんなことがあったでしょ？で、今日沖田隊長がひとりで屯所を出ていくのを見たんで、つい…」

「お前が俺を…護るつもりだったのかイ？」

まだ疑っているのか、沖田は猛への攻撃体勢は解いたものの、抜いた刀を納めないまま意地悪に笑う。

「いえいえ、そんなおこがましいことは！ただ俺、足だけは自信あるんで何かあったら応援呼ぶくらいはできるかと」

沖田が睨むからか謙虚さゆえか、猛はぶんぶん和大袈裟に顔の前で手を振って否定した後、しょんぼりしたように下を向いた。

「俺は土方^{あいつ}みてえに携帯忘れたりしねーよ」

「そーっスよね…はは…」

少なくとも“今は”猛に敵意がないことを確認し、沖田はようやく僅かに残した敵意も解いた。

でもじゃあ、さっきまでの殺意は何だったのか。

猛^{こいつ}が、それとも他の誰かか…。

考えても今となっては分からない。

「けどまア、狙われてんのは確かみてえだ」

沖田が呟き、また刀を構える。

猛は驚いたように沖田の視線の先、自分の背後を振り返る。

そこにいたのは…。

「！」

「真選組一番隊隊長、沖田総悟だな？」

抜き身の刀を持った、男が五人。

どうやら狙いは沖田らしい。
皆屈強な体つきで、華奢な自分たちはどうしても不利に見える。

「応援をつ…！」

先程言っていたように、沖田の助けになるため…。
応援を呼ぼうと息巻く猛を、沖田は静かに制止した。

「大丈夫だ。大した数じゃねえや。お前は邪魔になんねえように隅
つこに隠れてな」

沖田はそう言つて猛を下がらせると、前に出て刀を構える。

五人の男は一斉に沖田に飛び掛かる。

だが、所詮相手はそこらのチンピラ集団。
統率された兵士とは違い、どうしても力量によって少しずつ“ずれ
”が生じる。

一人目の男が振り下ろした刀、沖田はこれを軽々かわすと男の足を
引っ掛ける。

転びそうになる男を剣圧だけで吹っ飛ばし、二人目の男に思いつ切
りぶつける。

三人目の男が怯んだところで、背後に回って斬りつけると、怒った
残る二人が今度はできるだけ息を合わせて沖田に向かってくる。

左から来た男の刀を左手に持った鞘で払い、興奮して刀を振りかぶりすぎた右の男には、がら空きの胴体に一太刀くれてやる。

一瞬にして仲間を失った最後の男にはもう現れた時の勢いはなく、最後はあっさり沖田に斬り捨てられた。

「す、すごい…」

目の前で繰り広げられた鮮やかとも言える光景に、猛は口をあんと大きく開ける。

「感心してる暇があるなら誰か呼んでこいっらしよっぴけ。俺ア今日は非番で手錠も何も持ってねえからな」

放心状態の猛の肩を、とんと叩くと、沖田はそのまま猛の、折り重なって倒れる男たちの横を通り過ぎ路地裏を出ていく。

「は、はいっ！」

沖田に肩を叩かれた猛の方かというと、やっと我に返ったように返事をした後、男たちを連行するため携帯を取り出し応援を呼んだ。

沖田は去り際、そんな猛の様子を横目で見ながら、考える。

自分が感じていた殺意は、あの五人のチンピラが発したものだっただのか…？

確かに、大した使い手ではない、殺意を感じた時はそう思ったが、本当にそうだろうか。

気配はバレバレだが、どこに潜んでいるのかは全く気付かせない。

なんと言つか、缶蹴りでわざと鬼に自分の存在を明かしてくる奴のような、そんな感じ…。

そういった場合そいつの目的は、鬼の攪乱か、仲間を助ける、もしくは隠すことにある。

先程蹴散らしたチンピラにそんな器用なことができたとは思えない。

だとしたら、猛、^{あいつ}か…？

猛が俺を人気のないところに誘導するため…あのチンピラたちの殺意を隠すために決して自らの位置は気取らせず、わざと殺意を漏らして自分の存在を誇示した…？

でも、だったら俺が路地裏に入った時点で自らの姿を現す必要はなかったんじゃないか。

もしかしたら俺が猛^{あいつ}に疑いを向けるように誰かが仕組んだことの可能性も…。

珍しくごちゃごちゃ考えていると、だんだんと頭がこんがらがって
沖田は、ちっ、と舌打ちをした。

考えすぎるのは性に合わない。

「屯所で寝なおすか…」

呟くと、沖田はそのまま帰路についた。

接触

「さて…」

出張準備も済んだし、そろそろ出かけるか。

山崎が小さくまとめた風呂敷を担ぎ、屯所を出発しようとしたところ…。

「ん？」

自分とは逆に屯所に向かってくる私服の沖田と目が合った。声をかけようとして、異変に気付く。

「沖田隊長！どーしたんですか！その血！！」

遠目では分からなかったが、沖田の群青の着物にはところどころ血が飛び散っていた。

驚き目を白黒させる山崎とは対象的に、沖田はけろりと簡単に答えた。

「ん？あア。返り血でイ」

「って襲われたんですか！？」

「あゝ。まアな。つーか何その荷物」

沖田はさらりと答えると、山崎が担ぐ風呂敷を指す。

どうやら沖田に怪我はないらしいが、あまりに適当に話を流されて、山崎は何となく言葉をつつかえさせつつ言った。

「えっ、あ、ああ…。今日から俺、西国の方に出張なんですよ」

「…ふーん。じゃあ、じゃが●こタコ焼き味とハッ橋買ってきて」

当然のように土産をせびる沖田に、山崎はさっきまでの心配も忘れて苦笑を浮かべた。

「遊びに行くんじゃないんですから…」

「…何しに行くんでイ」

「えっいやそれは…」

沖田の視線が、急に鋭くなる。

いらないことを言ってしまった…。一応極秘任務なんだった。

明らかに、しまった、というような表情で顔ごと目を逸らす山崎に
沖田は何かを悟ったように鼻で笑った。

「土方ヤローか。まあいいや。それより出かける前にちよっといいか」

「何ですか？」

あれ、何だかあっさり解放された。

てつきり問い詰められると思っていた山崎は、ほっとしたように答えた、が…。

「貴寄猛…って、分かるか？」

山崎の肩がびくりと揺れる。

またも答えにくい沖田の質問を、山崎はとりあえず適当に「まかそうと試みる。

「え、ええと。六番隊副隊長補佐ですよね。はは…」

苦しい受け答え…。

沖田は疑わしげに目を細めてしばらく山崎を見ると、やがて小さく呟いた。

「…分かった」

「え？なにが…」

「てめえが何か隠してることと、口止めしてる奴が誰か、だ」

「あ、あの…そのオ…何のことで？」

「だからてめえがこれ以上言えねーのは分かった。あとは命じた本人に直接聞くからいい」

汗だくになりながらとぼける山崎は、沖田の推定を事実だと告げていた。

それだけ言い残すと、沖田は満足したように屯所の中へ消えて行ってしまった。

「ふー…。また副長にどやされるよ」

山崎は眩き、重い気持ちを背負いながらとぼとぼと歩きだした。

―。―。―。―。

着替えを済ませて、もうひと眠りするか、そう思った時にはもう夕食まで間もない時間となっていた。

今寝たら中途半端だと思い、沖田はなんとなく屯所内をぶらぶら散歩する。

と、目の端にやけにでかい影が映った。

なんとなく怪しいその影の主を物陰からそつと見遣ると、それはつり目で背の高い男…。

真選組の黒い隊服を着ているが、あれはどこの隊の奴だったか。

じつと観察していると、その隊士はキョロキョロと周囲を警戒するように見回すと、なぜだか今は誰もいないはずの副長室に入っていた。

「?」

何のつもりだろう。

隠れて部屋を覗き見る沖田に気付くことなく、隊士は土方の机に何かを置くと、すぐにそそくさと部屋から出ていった。

隊士が十分に離れたのを確認し、沖田は副長室に入り先程隊士が机に置いたそれに目を向ける。

「これは…」

それは、土方の携帯だった。

先日土方はこいつを忘れたせいで応援を呼べず、一人で戦うはめになったんだっただか。

なぜあいつがこれを？

「どづいつこったイ…」

沖田は携帯を拾い上げ、隊士の消えた方に怪訝そうな眼差しを向けた。

――。――。――。

「は〜」

いつまでたつても片付かない書類の山に、土方はうんざりして今日何度目かのため息をついた。

書類を持ってきた近藤も、別に一日二日でこれをやれと言っていた訳ではないが、何もしないのはしないで病人生活はかなり退屈だった。

右隣は無口なガキだし、左隣にいたじいさんは移動か退院か、とりあえずどこかへ消えた。

早く体を治すには休養するのが一番いいことは分かっているのだが、目の前の書類の数が自分の入院期間のように思えて、さっさと終わらせてしまいたくなる。

土方がまた大きなため息をつくとき、空いたはずの左のベッドから声がした。

「ため息をつくとき幸せが逃げてしまいますよ」

いつの間にそこに来たのか、ベッドの上には若い男がいた。

隣の気配に気付かないほどに自分は書類に熱中していたのだろうか。

いや、そんなことより…。

「お前は…」

「僕のこと、お分かりですか」

にこにこと笑う色白で面長の顔、切れ長の目…。
最近よく見た顔が、そこにいた。

「そりゃあ自分で面接した奴くらいはな。五番隊の一色隆太郎、だろ？」

本当は写真を見たから覚えていただけだか…。

土方が言うと、一色はまた、にこりと笑って衣服の隙間から包帯の巻かれた胴体を見せた。

「はい。ちょっとへマをしてしまつて。隣で少し、お世話になります」

「…そーか」

——怪我は嘘だな…。

土方は長年の勘ですぐに見抜く。

恐らく護衛…。しかしすごいタイミングだな…手配したのは山崎の奴か？

怪しむ心を気取られないように、土方はまた書類に顔を向ける。

敵だと決まつた訳ではないが、隣にいられてはおちおち寝てもらえない。

だが、怪しいこの男を直々に見張れる。

土方のそんな思いを知つてか知らずか、一色はまたにっこりと微笑んだ。

接触（後書き）

みんな怪しい＼（＾Ｏ＾）／笑

商いの国

商いの国…。

天下の台所、なんて二つ名があるのも頷ける。

建ち並ぶ商店の軒先から、がやがやと賑やかな声が飛び交う。

色とりどりの店の装飾は、いかにも派手好きなこの土地に似合う。

「活気があるなあ」

山崎は大阪に来ていた。

一瞬、仕事のこともなんて忘れて食べ歩きでもしようか、そんな思いが浮かぶ。

だが思いが浮かぶ度に一緒に土方の顔も浮かび、ぶんぶんと首を振った。

まじめに、まじめに。

そう思った矢先、美味しそうなソースの香りとともに大きな声に呼び止められた。

「兄ちゃん！ちょっと食べて行かへん？ウチのお好みは世界一やで

」

店先から手招きする割烹着の女。その後ろの扉からは、確かに食欲をそそる大阪名物、お好み焼きの香りが漏れだす。

「や、いいです」

山崎が香りの誘惑に負けそうになりながらもなんとか断ると、その短い言葉のイントネーションで女が、はつとした。

「なんや兄ちゃん東のモンかいな！ほんなら尚更お好み食べなあかんやん！」

「いいですって。あんぱん常備してるんで。それより、瀬戸さんって家この辺にあります？」

しつこく絡む女をかわそうと話題を無理矢理自分に持っていく。

女は少し驚いて、瀬戸はんのお客さん？にしては身なりが…、と呟いて不躰にも山崎を頭の先から足の先まで、値踏みするように視線を上下させた。

「いやあ、その…奉公です。奉公に来たんですよっ」

「ああ。下働きかいな。兄ちゃんも大変やな」

「はは…」

女は納得して哀れんだような顔を見ると、店の奥から地図まで持ってきて道を教えてくれた。

「ありがとうございます。ご婦人」

「いややわ〜ご婦人やて。あんた、ええ子そうやから教えといたるわ」

「？」

山崎が丁寧^{ていねい}に礼を言うと、女は“ご婦人”の響きが気に入ったのか、上機嫌で話した。

「瀬戸家は今、胡平様^{こへい}、あ、あそこの七代目の頭首^{まね}な。その胡平様^{こへい}がご病気^{まひ}やから娘の真幸様^{まゆき}が取り仕切つとんねんけど…これが気の強いお人^{ひと}でな。よお警察とも喧嘩^{けんか}しとんねや」

「警察と…？」

「やっぱりな、あそこまでの商売人^{しょうばい}やと色んな裏の人^{うら}らと繋がり持つみたいなんや。で、当然警察に睨^{にら}まれるやろ？そのたんびに喧嘩^{けんか}してるんやで」

「へ、へえ…」

「しかも真幸様の旦那は法務省のお偉方ときた。密輸密売し放題つて噂や。お江戸の警察はほんま何やってるんやろね」

興奮ぎみに話す女に、そのお江戸の警察は僕らです、なんて言えるはずもなく山崎は、はは…、と苦笑いをした。

その笑いが萎縮したためのものだと思えば、女はバシバシと励ますように山崎を叩く。

「そんなビビらんで大丈夫やて！下働きが真幸様に会う機会なんかほとんどないわ！」

「は、はア…」

痛すぎる鼓舞に若干引きながらも山崎は、頑張りや、なんて手を振る女に一礼すると、そのまま瀬戸家へ向かった。

商いの国（後書き）

くおまけ

銀「ね、俺ら次いつ出れんの？」

新「この間出たじゃないですか。さりげに銀さんだけ二話に渡って台詞あったでしょ」

神「私なんてここ最近しゃべってもないアル」

銀「あんなんちヨイ役じゃん。ジミー君なんか電話出演も入れたらほぼ出ずっぱりだよ。しかも今回から数話ジミー君回が続くらしいし。誰が喜ぶの？」

新「…まあ、作者が真選組メインを公言してるから仕方ないんじゃないですか。それに山崎さんにだってファンはいますよ」

神「あんなモン組織票ネ」

近「一番可哀相なの俺じゃない？メインの大將なのになんか独りだけ蚊帳の外だし…てか俺も命狙われリストに入ってたはずなのに何か…」

銀「げ！真選組が出てくんな！脇役でも俺らより出てるだろ！」

神「そうアル！ここは私たちの憩いの場！」

神銀「「立ち去れ」（呪）」」

山「なんか…必死だなあ…」

瀬戸家

瀬戸家前。

「うわぁ…すごいな」

山崎の目の前には、物凄くでかくて、物凄く派手な建物が建っていた。

五階建てくらいで高さはそれほどないが、敷地面積がとにかく広い。視力云々の問題ではなく、地上からでは家の全景を見ることができないほどだ。

城を模したその建物は、一階全てが商店、その上にはオフィス階が続く、最上階に瀬戸家の人間の生活スペースがあるらしかった。

一階の商店は外側こそ庶民にも解放的だが、奥に行くほど金持ちしか入れない特別な店になるらしく、山崎も途中で警備員にそれ以上の進行を阻まれた。

山崎は、死角からそつとその侵入禁止区域に石を投げ入れてみる。

《一階“ろ・九五六”侵入者》

警備員のひとりが無線機で何かを伝えた瞬間、物凄い数の警備員が集まり周囲を警戒して見回した後、石に気が付く。

安全が確認されると警備員たちは特に話をするともなく静かに石を回収してまたどこかへ消えた。

「こ、怖…っ！センサーでも付いてるのかな…。こりゃ侵入は無理だな」

瀬戸家についての話は道中、幾人かの街の人間に聞いたが、どれもよくない噂ばかりだった。

だがそれらはやはり全てが噂の範囲内で、土方に報告できそうなものはあまりない。

大阪まできて収穫ゼロってやばくね？

山崎がそんなことを考えながら瀬戸家の外壁沿いを目的もなく歩いていると…。

「ええ加減にしてくれんか！」

威勢のいい、女の声。

物陰に身を隠し声のした方を見遣ると、以前瀬戸准平の素性調査をした時に目にした顔が、裏口のような所から現れた。

准平の母でこの当主の娘、瀬戸真幸だ。

裏口からは他に、追い出されるような形で制服の男が二人、飛び出てきた。

「ウチは真面目に商売やつとるだけや。警察なんか介入されることはあらへんで！」

真幸は怒りをあらわにして制服二人を怒鳴る。
どうやら二人組は地元の警察らしい。

「いや、だからっ！」
「しかしですね…」

真幸がギャーギャーと怒鳴り続けるものだから、警察官は言い分を伝えるどころか言葉を挟むことすらできない。

「あれが瀬戸真幸…」

山崎が呟く。

短く整えられた黒髪に大きな黒目がちの目、高価そうな着物の彼女

は一応美人の部類に入るのだろうが、鬼のような形相でそれも台なしだ。

真幸に追い立てられて、結局警察官二人は何も言い返すこともできずに締め出された。

「はあ…勘弁してほしいのはこっちやわ。あんまり手え出すな言われたり不正は暴け言われたり…ほんでなんやかんやで来たら追い返されるだけやろ？」

仕方なく帰路につく二人組のひとりがため息をつきながら愚痴を零すと、横のもうひとりも苦笑いをして答える。

「要するにあれや。手え出すな言うんは甘い汁啜っとる連中、出せ言うんはおこぼれ貰えへんかった連中やろ」

「警察も腐ったなあ」

警察官ふたりは、ほんまになあ、なんて言いつつもはや諦めたようにケラケラ笑う。

腐った上層部にも、それを笑って済ます彼らにも…。

こっそりと聞いていた山崎はなんとも言えない悔しさのようなものを感じ拳を握った。

お喋りな警察官たちはさらに話を続ける。

「でも甘い汁吸った連中も瀬戸が最近力付けすぎやー言うて危機感持つとるらしいで。なんや中央までもが捜査に乗り出したとか」

「やから最近はお撃命令の方が増えてんのか」

「そーゆーこつちや。なんや近々中央の松平公お抱えの真選組まで動き出すって噂もあるみたいやわ」

まさかのタイミングで自分たちの名を出され、山崎は思わず声を上げそうになる。

もちろんそんな話聞いていない。

だが、そこまで話が広がるほど瀬戸が力をつけているのかもしれない。

「真選組かア。あーでもあれの婿は法務省のモンやからな。瀬戸家が力持てば持つほど婿の中央での権力も上がる訳や。自分らの地位脅かすかもしれんからそりや必死にもなるわな」

「ほんま下っ端は辛いでえ」

成る程ね…。

またへらへら笑いながら遠ざかっていく二人組を見送り、目の前の馬鹿でかい屋敷を眺めて、山崎はため息をついた。

「にしても…西の人間はよく喋るなあ」

瀬戸家（後書き）

銀「出張回か…通りすがりに偶然を装って“なにやってんの”で出演計画はムリがあるな」

新「あんたいつもそんなことしてたんだ…」

神「可哀相な主人公ネ」

企む影、近付く影

大阪から京都に着いた時には、すっかり夜中になっていた。

天人襲来から一気に文明が進み、建物は高層化し、きらびやかなネオンが光る江戸や大阪とは違い、ここ京都は未だ時間が止まったかのように古からの姿をほぼそのままの状態いにしえで保っている。

きらさらに装飾された豪華な建物も洒落た店もない。だがそれが逆に、他を寄せ付けない高貴さと魅力を醸し出している。

「あれが御所、かあ」

山崎は建物から少し離れた丘から双眼鏡で天皇の住まい、京都御所を見ていた。

建物を囲うようにしてつくられたお堀は、現代の技術をもってすれば簡単に乗り越えられそうだ。

だが、御所自体の神聖な雰囲気と、瀬戸家に負けず劣らずの数の警備員が、簡単に侵入できないことを物語っている。

「流石にすごい警備だ……。かといって申請したって俺みたいのが中に入るのは無理だしなあ……」

どうしたものかと考えるも答えは出ず、退屈してバードウォッチングなんて始めようとした時、御所にほど近い小さな竹林にちらりと動く影が見えて、双眼鏡を動かす。

「あれは…一色家の頭首、宗松公…」
むねまつ

よく見ると口元が動いている。誰かと話している…？

「！」

宗松が少し動いた隙間から、対面に立つ女が見えた。

あれは確か、天皇の弟君おとうぎみの乳母…。

こんな夜中に二人きりでいったい何を…？
何にしても怪しいことに変わりはない。

行ってみよう。

山崎は立ち上がり、急ぎ音を立てないように竹林へと向かった。

・
・
・
・
・

「ところで宗松…あんさんの息子…うまくやってるんやろうな」

「ええ」

山崎が現場に向かうと、タイミングよく談笑を終えた二人がちょうど話の本題に入る、といったところだった。

山崎は持ち前の地味パワーで、気付かれないが会話は聞こえるギリギリの位置まで気配を断ち近付く。

「組織を壊すには足場から、言うてな」

壊す…？

穏やかではない乳母の呟きに緊張が走る。

山崎は全神経を耳に集中させる。

「早く孝暗様^{たかくら}がお国の頂点に立つんを見たいわあ」

孝暗様、天皇の弟君だ。

この乳母は幕府から朝廷へ、実権を取り戻そうと考えているらしい。

だけど、今の天皇は兄の彰治様のはず。

弟君に政権がまわってくることはない。

山崎の思いを代弁するように、宗松が言う。

「彰治様は…どうしはるんで？」
あきはる

「あれはあかん。征夷大將軍の坊ほん以上にただの人形や。適当に始末するしかないんちゃう。やっぱり孝暗様こそ頂点に立つに相応しい、そうやる？」

「左様ですな」

この乳母、幕府のみならず現天皇の彰治様まで手にかけるつもりらしい。

腹を痛めた子ではないが育ての親として、孝暗様に並々ならぬ愛情を感じているのだろう。

乳母は更に続ける。

「何百年…朝廷が国を治めてきたのに將軍やら天人やら…あんなポツと出の新参者にでかい顔されるなんか阿呆らしいやないの」

そう言つと、乳母は念を押すように宗松を睨む。

「せやから隆には頑張ってもらわなあかねや」

睨まれた宗松は特に動じた様子もなく、はい、と返すと少し笑って朗報を告げた。

「隆太郎どすが…今、副長の護衛をしとるそうですわ」

――！

「そらええな！寝首搔くにはもってこいやないの」

護衛…？

それってまさか、近藤に依頼した副長の護衛…？

山崎が混乱している間に、話は収束へ向かう。

「朝廷が権力を取り戻した暁には…あんたもそれなりの地位に引き上げたさかいにな」

「ありがたき幸せ」

話を終え林から出ていく二人から慌てて隠れ、山崎は思う。

なんてこった…。

土方が“何者か”に命を狙われているから護衛を付けるよう、近藤に提案した。

それなのによりにもよって狙っているかもしれない張本人を護衛に付けるなんて…。

いや、ごちゃごちゃ考えてる場合じゃない…！

「副長に電話…って、病院だからダメじゃん！じゃあ、局長に…」

しかし、近藤の電話は繋がらない…。

だんだんと焦りが増してくる。
一刻も早く帰らなくては。

——副長…っ！

。・。・。・。・。

すっかり夜も更けた、江戸の街。

真つ当な人間は明日に備えて眠っている時間だから、当然ここ、大江戸病院の患者たちも皆すやすやと寝息を立てている。

もちろん土方も、昼間書類と睨めっこして疲れたのだろう。
目を閉じ、静かに肩を上下させている。

そんななか、動く影がひとつ。

影はそっとベッドを降り、寝ている隣の男に手を伸ばす。

完全に眠っている…。

伸ばした手が首元へ進み、影が怪しく笑みを浮かべた。

突然の訪問者

眠るのは重傷の怪我人。

片手で喉元に体重をかけ、片手で体を押さえ付ければ簡単にその上下する肩の動きは止められるだろう。

男は残酷なほど冷たい眼差しで寝ている男に手をのばす…。

「何のマネだ？」

ゆらりと睫毛が揺れたかと思うと、男と男の目が合った。

土方の開いた瞳孔が睨むように手の主を見上げる。

「起きてらしたんですか」

「今な」

にこり、と微笑んで一色は別段乱れもしない土方の布団を整える。

「お風邪をひかれては困りますから」

「護衛として、か？」

一色は“護衛”という言葉にわざとらしく驚き、やがてまた目を細めた。

「バレていましたか」

「隣のじいさんが突然どいたし、タイミング的にもな。それにお前常に刀持ってるだろ」

そう言つて土方が目を向けた辺りから、一色はおもむろに脇差を取り出して、降参した、というように息をついた。

「その通りです。参りましたね…局長に怒られてしまう」

脇差をしまい苦笑する一色を土方はなおも睨み、問う。

「怒るのは近藤さんだけか？」

「…どういふことでしょう？」

わざとやっているのか、こいつのしらばっくれ方は白々しい。

何を問うてもにこにこ適当に流す一色に、土方は、ふん、と鼻で笑うと目を閉じた。

「とにかく俺アこんな状態だ。しつかり頼むわ」

「はい。お任せ下さい」

につこりと笑ってそのままベッドに戻っていく一色の背中を確認し、土方はまた眠りについた。

――。――。――。

チュンチュンと朝の鳥たちが鳴いて、そろそろ目を開けようか、土方がそう思った時…。

再び言い知れぬ殺気が土方を襲った。

――またあいつか…？

でも、今日のそれは昨日のとは比べものにならないほど強く、息苦しく身動きがとれない。

身動き、が…。

アレ？これおかしくね？
全く体が動かねえ…。

もしかして金縛り…いやいやいや違う！そんなのいからね！金縛り
ってあれだ。脳みそは起きてるが体は寝てるっていう状態のことで
…アレ？逆だっけ？

とにかく目え開かない金縛りは全部夢らしいよ…って誰に言っ
てんの俺？

てゆうかアレ？

目、開く…

「土方さん」

そこにはオバケでも幽霊でも何でもない、だがそれらより冷たい眼
差しの沖田が立っていた。

「そ、総悟…！？どうしたんだ」

ほっとしつつもまだ動悸が治まらない土方が少々どもる。
というか、なぜかまだ体は重く、動かない。

「どうしたって、見舞いに決まってまさア」

けろりと言う沖田の視線は何だか変だ。自分を見ていない。
沖田の視線を追い、自分の腹の辺りを見てみると…。

黄色…？

マヨネーズ、大量のマヨネーズだ。

ベッドの上、顔以外全てに覆いかぶさるようにマヨネーズが敷き詰められている（しかも業務用特大サイズ）。

それはもう、身動きが取れないほどに。

「何コレ天国！？いやいや騙されるな俺。イジメだよね！？」

「えゝ。喜ぶと思って持ってきたのに」

「限度があるだろ…。てゆうかお前が見舞いに来るとか…どうせ何かあるんだろ」

どうにかこうにか、マヨ山から抜け出しながら土方が言うと、沖田はニヤリと笑った。

「当たり前。聞きたいことがありやして」

話したそうとして、沖田はチラリと横の一色を見遣る。

一色は視線の意味に気付きベッドから体を起こした。

「ああ…。じゃあ僕は席を外しますね」

だが、こんな開放的な空間で話すことでもないだろう、そう思った土方は立ち上がる一色を制止した。

「いや、いい。俺たちが動こう」

「大丈夫なんですかイ？」

なんやかんや言っても怪我人。さすがの沖田も若干気を遣って尋ねる。

さつきその怪我人の上にマヨネーズ積み上げたくせに…そう思った土方だが、時間の浪費は避けたい。
ぐっと言葉を飲み込んだ。

「ちょっと動くくらいは何でもねえよ。小便にも行ってたんだから」

「何だ。てつきり“コレ”で屈辱受けてるのかと思ってやした」

どこから持って来たのか、沖田が手にするは尿瓶^{しひん}。

ベッドから動けない重病人が用を足すとき、手伝ってくれる看護師さんが持って来る“あれ”だ。

やっぱりプライドが許さない。土方は断固“それ”を拒否し、看護師が止めるのも聞かず痛んだ体を引きずりながら毎回自分で廁へ行っていた。

「それだけは絶対に嫌だ」

「ええ？ドMには最高のご褒美なんですよ？」

「誰がドMだ！」

そんなこんなで、ふたりはいつもの如く騒ぎながら屋上へと向かう。

そんなふたりの背中を、一色は真剣に、睨むような目つきで見送った。

疑わしきは

屋上。

土方はひとつしかない出入口に見張るように体を向け、柵にもたれて対面の沖田に問う。

「で？話つてのは？」

「山崎に何調べさせてるんで？」

「何でもねえよ」

何となく予想がついていた問いに、土方はとぼけてみせる。

「いい情報持ってきたんですけどね」

「…情報ならウチの監察が集めるからいらねえよ」

案の定なかなか折れない土方に、沖田は最後の手段に出ることにした。

「じゃあコレ、壊しちゃおうかな」

沖田がポケットから取り出したのは、土方の携帯。

沖田は携帯の端と端を持ち、パカパカ携帯を反対側にパカパカしように力を込める。

「――！何でお前が俺の携帯を……てゅーか折れる折れる！」

ミシミシと音を立てる自分の携帯を目の前に土方が明らかに焦りの色を見せると、それが沖田のドS本能を掻き立てたらしい。

さらに携帯に力を込める。

「ちよつといろいろありやしてね。まあこれだって情報機器でしょ。山崎がいたらいいんでしょ」

「アホか！携帯の方が山崎なんかよりよっぽど賢いしハイスペックだろ！」

「酷い」

いつの間にか目を離していた扉から飛んだ声……

山崎だ。

ちつとも存在に気付かなかった。
さすが地味……。

「あ、山崎……。お帰り」

――。――。――。

「まあ、そーゆーワケですよ」モグモグモグ

「ふうん。スパイ探しねえ」ポリポリポリ

「マヨネーズが合うな。たこ焼き味」ニュイ〜ン、ポリポリ

山崎の土産、じゃが●ことハッ橋を食べながら三人は輪になって話
す。

「で？どうだったんだ？出張費使うだけの価値ある情報は得られた
んだろうな」ニュイ〜ン、モグモグ

「うえ……。はい。まずは瀬戸。あそこの父親、誠十郎は嫁の商売の
為に密輸密売を幹旋してる疑いがあるらしいです。最近力を持ちす
ぎだつてんで中央から睨まれてるとか。しかもとつつぁんと同期で
昔から仲悪いみたいですね」ポリポリ

「それで警察組織を潰そうとしてるってえわけだ。……奇抜な味だな。
ハッ橋ソーダ味」モグモグ

「可能性としてですが」ポリポリポリ

山崎は一旦口の中のものを飲み込み一息つくと、また話し出す。

「で、一色。秘密裏に天皇の弟君、孝暗様の乳母とつるんでました。乳母は孝暗様に天皇を継がせたいらしくて、現天皇の彰治様を排した後、中央を切り崩し朝廷権力を回復させようとしてるみたいです。その手始めが真選組のようですね」ムシャムシャ

「結果的にどっちも怪しかったか」ニュイーン、ポリポリポリ

思った通り、怪しいふたりの情報に土方が鼻を鳴らす。

山崎があらかたの報告を終えたことで一旦落ち着いた話だったが、
沖田が、でも、とまた切り出す。

「怪しいのは残りのふたりもですぜい」ポリッ

「どういうこった？」ズゾゾ

「コレ」ポリポリフキフキ

沖田が、先程の土方の携帯を掲げる。何故か油でギトギトしている。
フキフキ

「誰が持ってたと思います？」モグモグモグ

「持ってたも何も部屋に忘れただけで…」ニユイ〜ン

「違いまさア。普段電話がかかって来ることない友達ゼロの寂しい人だから、二、三日携帯なくても気付かないんでしょうが…」ムシャムシャ、ゴクン

「うるせえな！普通に忘れただけだろが。てゆーか人の携帯に菓子油なすりつけるのやめて」ニユイ〜ン、パリパリ

土方の言葉を無視して、ちょっと間を作る沖田に、山崎が、それで？と続きを促す。

「この間見たんですよ。花井とかいうデカイ隊士がこっそりこいつを土方さんの部屋に置きにくるのを」ポリポリ

「！」「ゴクン

「応援を呼ばせないために、意図的に隠した…？」モグモグ

驚きで一瞬止まった指を再びお菓子に戻して、山崎が言う。

「さア。もしくは何らかの情報を抜き取るためか…」モシャモシャ

「別に何もねえぞ。大事なことは直接言うからな」ニユイ〜ン、ポ

リポリポリ

「まあ、ただ拾ったのを置きに來ただけかもしれやせんが」パリポリ

土方は、ふうん、と空を睨^くむと、沖田に視線を戻す。

「んで？もうひとり、貴寄猛は？」ズゾゾ

問われた沖田は珍しく自信なさ氣に眉をしかめた。

「あれは何ていうか…別に何があるわけじゃありやせんが…。何となく、モヤモヤと嫌な感じがするんでさア」ポリッ

「なんだそりゃ」ニユイ〜ン

そういえば、と山崎がじゃが●この二箱目を開けながら切り出す。

「沖田隊長が返り血まみれで帰ってきたとき…貴寄がいたようですね？」ポリ…

「ああ。奴が言うに、俺が狙われてるかもしれねえからつけてたらしい」バリポリ

「つーかお前やっぱり狙われてたのか」ニユイ〜ン、ポリリ

「さア。今回の件と関係あるのか知りやせんが」ムシャムシャ

沖田は否定も肯定もせずに目を逸らす。
土方も、そんな沖田を薄く睨むとすぐに手元のマヨネーズに顔を向けた。

「あんまり単独行動はするなよ。あと大通り歩け」ニユイ〜ン

「土方さんがソレ言いますか」モグモグ

モグモグパリポリ、ニユイ〜ン、バリバリ……………

「と…とりあえず今日は貴寄の故郷、武州に行く予定ですから、彼のことでもう少し調べてみますね」モシヤモシヤ

しばらくして山崎が立ち上がり、また自らの出張の予定を告げる。

「じゃあ俺は一色に探りでも入れるか。総悟、お前も話聞いたからには協力してもらうぜ」ニユイ〜ン、ムグモグ

「貴寄と花井を見張ればいいんでしょ。そういやあこのこと、近藤さんは知ってるんで？」ポリポリ

「いや」ポリ…

立ち上がり扉に向かって進もうとした山崎が、振り返る。

「でも局長、馬鹿のつくお人よしだからなぁ。隊の仲間を疑うとできないでしょ？てかすぐ顔にでるから疑ってるのバレそう」モグモグ

「でも俺、土方さん、と狙われてるなら局長の近藤さんもヤバいかもしれやせんね」ポリポリ

可能性は十分に有り得る。土方は頷き、言った。

「そうだな…よし、お前ら狙われてる同士、なるだけふたりに行動しろ。お前と近藤さんがいりゃあ、少なくともこんな状態にはならねえだろ」ニユ…バヒュッボヒュッ

「近藤さんのストーキングにも同行するんですか？勘弁して下さいえ」ポリポリポリ

「これを機会にやめてもらえ」ムシャムシャ

「副長、無理しないで下さいね。アンタ怪我人なんだから」モグッゴクン

山崎が少し心配そうに（でもお菓子を食べながら）言つと、土方は心配されてむず痒いのか目を逸らし、早く行けとでも言つように、しっしっ、と手を振った。

「へーへー。お前らもな」

沖田は土方の要望通りさつさと、山崎はやはり少し心配そうに振り返った後、屋上を後にした。

あとに残されたのは散乱したお菓子の食べカス、そして…

「てゆうーか俺らパリポリムシヤムシヤうるさくない？」

土方の静かなつつこみだった。

警告

屯所に戻ると、近藤の姿はなかった。

適当に捕まえた隊士に聞くと数時間前、どうやら松平に呼ばれて出ていったらしい。

昼には帰ると言っていた、と付け足す隊士の言葉通りならもうそろそろ帰ってくるはずだ。

そう思っただけで部屋で寛いでいると、ものの数分で戻ってきた近藤に声をかけられた。

「お、いたいた。総悟、ちょっと着いてきてくれ」

「あ、近藤さん。着いてくっ……どこへですかイ？」

先程お気に入りのアイマスクを着け寝転んだところだった沖田が、身を起こし言う。

「中央だ。とつつあん共々大老の井威助いすけすけ介公に呼ばれてるらしくてな。最近の俺たちの失態についてだが、俺以外の現場の話も聞きてえらしい」

「スケスケ？…いいですけど、俺でいいんで？」

一隊長が中央にお呼ばれすることなんて、ほばないことだ。

そういう堅苦しい仕事はいつも、
堅苦しい奴ひじかたの仕事だから。

でもまア、近藤さんを護るってことはこういつのにも着いてかなきゃなんねエってコトか。

というか、近藤さんも俺を護るためにわざわざ理由をつけて俺を連れて行くとしてるのかもしれないエ。

沖田がそんなことを考えているのも知らず近藤は、にかつと白い歯を見せる。

「いいさ。ホラ、今はトシがいねえだろ？ウチのNo3はお前だからな」

「土方さんと違って大したことは話せやせんけど」

「大丈夫だ。俺も大したことは言えん」

―それはそれでどうだろう…。

―。―。―。―。

江戸城…大老謁見の間。

美しい装飾が施された台座に座るのは大老、井威助介。傍らには従

者の男が静かに座している。

「松平君と、近藤君、と…」

眼前に正座する松平、近藤、と視線を移してもうひとり…動きを止めた井威に、横の従者が素早く答えを告げる。

「一番隊隊長の沖田総悟です」

井威は、ああ、と納得したように呟くと、怪訝そうな顔を向けた。

「うん？土方君はどうしたの」

「あ、ト…土方はちょっと、任務中に怪我を負いまして…」

近藤もいつになく緊張している。

井威は、ごによごによと話す近藤を見下すように目を細めると続けた。

「大丈夫、なのかな？」

「あ、ハイ。命に別状は…」

「そうじゃないでしょ。副長がそんなに大丈夫なのって聞いているの」

「え、と…」

「全く…しっかりしてくれないと困るよ？天導衆の皆々にもご指摘を受けてるんだからね」

怪我の心配など微塵もする気がない井威に、さすがの近藤も眉を寄せる。

「ですが…っ」「いやああ、すみません。私からも言っておきますからして」「

だが反論しようとした近藤の言葉は、松平のでかい声によって遮られた。

松平は不服そうな近藤を睨みつけ、井威にはどうぞどうぞと続きを促す。

また保身に走ったよ、この親父…。

「まあいい。で？今回の失態の要因は何かな？」

「その…今調査中でしてえ…」

はつきりしない近藤の答えで、次は沖田に質問が飛ぶ。

「君は？何だと思う」

沖田は一瞬考えるように視線を斜め下に向けると、すぐに井威に戻す。

「さあ…最近ネズミが出て不衛生だから、皆調子でも崩してんじゃないですか」

「ネズミ？」

掃除はしてるはずだけどなあ、とマジボケする近藤は置いておいて、松平は渋い顔、反対に井威は、くくつと笑った。

「はっはっは…。面白き男よ。若さゆえかな。深くは聞かないが、あまり噛み付くような態度はするものじゃないよ」

「すいやせん。作法を知らないの」

沖田は悪びれる様子もなく軽く返す。

「とにかく君はもう外に控えていなさい。松平君と近藤君にもう少し話があるからね」

井威が笑って退室を促すと、沖田は軽く会釈して部屋を出ていった。

あゝなんか多分怒られる。そんで多分、横のオッサンにも。

言っていたことはよく分からなかったが、それだけは分かった近藤は顔を歪めたのだった。

――。――。――。

「すいやせ〜ん。廁行つてきても？」

待たされるってえのは退屈だ。

松平と近藤の話が終わるまで、と通された一室で粗茶を飲んでいた沖田が、部屋の前に見張るように立っていた侍にでかい声で尋ねる。

「……あちらに」

城でぬくぬくと育ったであろうこの侍は、気品のかけらもない沖田の態度に少し嫌悪感でも感じているのか、ちよつと顔をしかめて廊下の奥を指差した。

そんな侍の態度も特に気にする様子もなく沖田は、どーも、と一声かけると部屋から出ていった。

沖田が向かったのは厠、ではなく資料室。

沢山の資料の中から、組織図らしきものを引っ張り出す。

「えーと。花井、花井…花井　古保ふるほこいつか」

城を構成する者たちの写真付きの図の中に、いつか見たのっぽでつり目の隊士にそっくりのオヤジを見つけた。

花井古保…役職は老中らしい。

すでに山崎がいろいろ調べているだろうからこんな公のプロフィールに真新しい情報なんてないだろうが、一応目を通そうか、そう思った時…。

背後から話し声が聞こえて、思わず隠れる。

近付いてきたのは、胡散臭い顔のオヤジと、写真のオヤジ。

見たところ胡散臭い方が花井の親父に絡んでいるらしかった。

「おたくの三男坊、元気にやってるのかい？」

「まあまあだ」

「真選組にいるんだろ？よくあんな野蛮なところに息子をやったなあ」

好き勝手言いやがって。

若干の不快感を感じた沖田だったが、話の続きに耳を傾ける。

「あれは三男だからな。いざとなったら捨てればいい」

古保が冷たくいい放つと、隣の男はニヤリと笑う。

「酷い父親だね」

古保は、フン、と鼻で笑うと親とは思えない冷たい表情で息子を語る。

「花井家の中であれだけ学も腕つぶしもない。少しは役に立ってもらわんとな」

胡散臭いオヤジは、怖いね、なんて茶化すように言ったあと、思い出したように、あつ、と零した。

「真選組といえば、今助介様のところに来てるらしいな」

「スケスケ…？」

「今回の失態続きで真選組は勝手に崩壊しそうだがね。おたくの息子が頑張るまでもないんじゃないかい？」

「なアに。あれは“保険”さ」

オヤジたちはそれぞれ違った方面で腹の立つ笑みを浮かべて遠ざかっていく。

「こりゃあ…やっぱりあの携帯はわざとだな」

沖田は呟き、さらに探りを入れるため歩きだそうとする、が…。

カチャッ

「！」

後頭部に、冷たく固い何かが当てられる。

「あんまりチヨロチヨロされると困りますねえ」

背後の男はそう言うと、振り返るな、とでも言うように後頭部のそれをぐりぐり押し付ける。

「ヘエ…お大臣様ってえのは、客に銃向けるわけだ」
そんなもん

「お客様はお客様らしく、大人しく出されたお茶を飲んでいて下さいな」

「お茶飲みすぎて厠行きたくなっちまってね」

銃を押し付けられているのにもかかわらず顔色ひとつ変えない沖田に男は、ふっ、と笑いながらも牽制をかける。

「ククッ…とにかくこれは“警告”です。子どもがあまり首を突っ込むものじゃない」

一応“警告”と言うのは本当らしい。

男はそれだけ言っと、静かに沖田の頭から銃を離す。

「次にお出しするのがお供え物にならないことを祈ります」

去っていく男の姿を、横の大きな窓ガラスで盗み見る。

男は大きな笠と黒いマントのようなもので身を隠してはいるが、隙間からちらりと見えたゴツゴツした手は、天人のそれだった。

沖田は目を細め、ため息をつく。

「キナ臭え連中ばかりで嫌になるね」

警告（後書き）

スケスケさん……。まあ、分かる方は多いと思いますが、モデルは井伊直弼です。

名前だけ借りたので性格とかは知りません（^^；

幼なじみ

ところ変わって田舎町、武州。

「お久しぶりです。ミツバさん」

武州に行くならついでに姉上の墓を磨いてこい、そう沖田に言われて寄ってみた方がいいが、ミツバの墓はすでに綺麗に手入れされていた。

きつと誰かさんたちがマメに掃除に来ているのだろう。

山崎は、ふっと笑って墓に手を合わせた。

お参りも済んで、墓地を出ようとした時、なぜかひとつの墓が目についた。

石に彫られた文字を見ると…。

貴奇家之墓…。

墓には花と、お供え物が乗っていた。どちらもまだ新しそうだ。今日の調査対象の彼も、ちよくちよく墓参りに来ているのだろうか。

そんなことを考えつつも山崎は墓地を後にした。

――

「履歴書によるとここからそんなに遠くないんだけど…」

道が分からない…。

山崎はキヨロキヨロと辺りを見渡して、畑仕事をする老人を見つけた。

あの人に聞いてみよう。

「あのー。貴寄さんってお宅、この辺にありませんか？」

「うん？貴寄さん？あーあった。あったのう…」

ラッキー！いきなり知ってる人だ！

老人は畑を耕すのを中断し、こちらをじっと見る。

何だこの間？

「あ、えーと、教えていただけますか？」

山崎が戸惑いぎみに尋ねると老人は、おお、と思い出したように手を叩いた。

「いいぞ。ほら」

山崎の手に、鍬が握らされる。

「え？」

「こつ…腰を落としてな」

自分は今畑仕事を教えられているのだろうか…？
えっ…。なんで？

鍬を握って棒立ちの山崎が、もう一度尋ねてみる。

「い、いや…貴奇さん家を…」

「貴奇さん？あゝあったの」

老人はまたこちらをじっと見て動きを止める。

きつとボケてるんだ。

適当にお礼を言っただけで行こう。

「あ、もういいです。ありがとついでに…」

その場を離れようとした山崎を見て突然、老人の目がカツと開いた。

「キヨシイイ！逃がさん！！逃がさんぞ！！お前は農家を継ぐんじゃああ！！」

「ギャアアア！！」

鍬を掲げて信じられないスピードで襲ってくる老人は化け物が如し。

山崎が涙目で逃げようとした時、老人の頭に緑の何かが飛んできて、そのまま老人ごと吹っ飛んだ。

「もーおじいちゃん、何やってるのっ！ごめんなさいね。ご迷惑を」

現れたのは見目美しい黒髪ロングの十四、五の少女。

…オタクのツボっぽい少女。

手にはなぜか大量のキャベツを持っている。

あ、おじいさんを仕留めたのはこれだ。

あれ、おじいさん動かなくなね？

「あ、いえ。てゅーかコレ死ん…でないわ」

少女はにっこり笑う。

何かコワイ…。

ごめんおじいちゃん、これ以上聞けない。
もういいや。とりあえずいいや。道聞こう。

「ところで貴寄さんって家…」

山崎がやたらと下から、探るようにならんと、少女は何事もなかったかのようににっこり笑った。

「貴寄さんの知り合い？」

「あ、まあ…昔少しお世話になって…」

「そうなの…。でもあそこのご夫妻、少し前に亡くなってしまったのよ」

だったら来るまでに見た墓は、彼の両親のものだろうか。
山崎はさらに尋ねる。

「息子さんは…？」

「猛君？彼もいないわ。最近江戸に出て、あの真選組に入ったんですって」

「そうですか…」

まあ、知ってるけど。

もしかして何の情報も得られないかも。

山崎がこっそり肩を落としていると、知ってか知らずか少女が話を続けた。

「でも不思議…。兄さんは幕府に殺されたんだってずっと言っていたのに。どうして真選組なんかに…」

「幕府に…？」

思わぬ情報が出てきて、山崎はつい少し前のめる。少女は少し怪しんだようだが、続けた。

「お兄さん、攘夷志士だったのよ。それで…」

「！」

攘夷志士…だとしたら、真選組をおとしめる理由としてはバッチリだ。

山崎が黙ったまま、驚いたように目を見開いていると、少女がまた怪訝な顔をする。

「どうかした？」

「あ、いえ…知らないうちに大変なことになってたんだなって…」

山崎は慌ててごまかすと、遠慮がちに少女に言った。

「あ、あの。やっぱりお家、教えてくれませんか？手を合わせに行きたいので」

――・――・――

「あ、タケちゃん？」

『お絹？どーしたの？』

山崎を案内し終え、黒髪の少女は江戸にいる幼なじみと話すため、電話機を握った。

数コールの後、幼なじみの声が聞こえて少女は顔を少し綻ばせるが、すぐに心配そうな表情で言った。

「今日、おじさんとおばさんの知り合いって人が来たの。タケちゃんのこと知ってるみたいだったけど」

『…誰？』

「あ、名前聞くの忘れた！」

ちょっと抜けた幼なじみに、電話の向こうの少年が苦笑する。

『何だ。意味ないじゃん。どんな人？』

「ええと…十代後半から二十代前半くらいで…特徴…特徴…。あ、特徴がないのが特徴みたいな…ザ・地味って感じ？」

『山崎さんか…』

「えっ？」

地味も行き過ぎると個性。

自分を調べに来る“地味”なんて、山崎さんくらいだろう。

自分の拙い説明で訪問者が分かってしまったらしい少年に、少女は不思議そうに声を上げる。

だが、少年は疑問に答えることなく先を促した。

『いや、何話した？』

「うん？普通に家族のことを簡単に。あと手を合わせるって言っから、家に案内したわ。駄目だった？」

おずおずと尋ねる少女を思い、少年はできる限りの優しい声を出した。

『いや…別にいいよ。知らせてくれてありがとう』

少女は安心したように、うんっ、と言うと話題を変えた。

「それより、元気でやってるの？そっちに行ってから全然連絡よこさないじゃない」

『ごめんごめん。忙しくて。でも元気だよ。お絹こそ、元気？』

答え半ばに質問を返されて、でも気にかけてもらえたのが嬉しくて少女は複雑な表情で答える。

「私はいつも元気よ？それより何で…」

『あ、ごめん。まだ仕事中なんだ』

「タケちゃんっ！」

少年は一声告げると容赦なく電話を切ってしまった。
ツー、と言つ終話音を聞きながら、少女は不安そうに俯いた。

真選組屯所…。

猛は乱暴に切った電話を見つめ、小さく呟いた。

「山崎さん、か…」

弟（前書き）

久しぶりに万事屋メンバー登場です。

弟

「キサキ、キサキ…うゝん…どっかで聞いたような…」

今日も依頼がなく暇な万事屋で、銀時がぶつぶつと呟く。

「どうしたんですか？」

すっかり主夫と化した新八が洗濯物を干しながら問いかけると、ソファで日曜の親父みたいな格好でテレビを見ていた神楽が煎餅をかじりながら馬鹿にするように言った。

「今日は一段とマヌケ面ネ」

「ヅラじゃない桂だ！」

「うわっ！」

窓から入ってきたのはテロリスト桂。

どうやらマヌケ“面”^{ヅラ}に反応したらしい。

「登場が無理矢理すぎるアル」

神楽が軽蔑するように言うも、確信犯らしい。

桂は、ふっ、と笑って返した。

「こうでもしないとなかなか出れそうもないからな」

銀時も桂の無理矢理の登場にはちよつと引いたが、聞きたいことがあったので気にしないことにして話した。

「まあちようどいいや。ツラ、お前に聞きたいことがあってよ」

「ツラじゃない桂だ！」

「鬘」

「そつちのカツラじゃない桂だ！」

「ハイハイ分かった分かった。それよりお前さ、キサキって名前に聞き覚えねえ？」

面倒臭くなって適当に流す銀時に少し不満を残しながらも、桂は聞き覚えのある名前に首を捻る。

「キサキ…貴寄光か？」

桂が記憶の隅を探り、行き当たった答えを呟くと、銀時は、ああ！とすっきりした、と言うように笑った。

「ツラ・光ペアか！」

「そういえばそんなからかわれ方もしていたな…」

桂は苦々しく、銀時は懐かしそうに目を細める。

攘夷戦争で出会った同士…。

桂と光は、名前の組み合わせが面白い、それだけの理由で一時ペアを組まされていた。

「光の苗字ってそんなだったか…。もう戦争も終結間近の時に田舎から出てきたんだよね…」

「いつも弟の話をしていたな」

「あいつも…死んだんだっけ」

暫ししんみりとした後、桂が怪訝な顔をする。

「…だが何故急にあいつの話を？」

「いや、ちょっとな。あ、なあ、弟の名前覚えてるか？」

桂の質問は軽く流し、銀時はまた尋ねる。

しかし銀時のそういう態度はいつものこと。
桂も特に気にせず質問に向き合う。

「確か…タクヤ、タケシ、違うな…」

「猛…？」

「そうそう。猛だ。お前にはよく覚えているな。やっぱり何かあるんじゃないか？」

「別にい…」

こういう時の銀時はどうせ聞いたって答えない。
桂は諦めたようにため息をついた。

しかし、この名前に意外な人物が首を傾げる。
攘夷戦争なんて知るはずもない新八だ。

「その人、僕も何か聞いたことあるような…」

そういえば山崎の話聞いてたとき、新八もいた。

どこから聞いていたのか知らないが、あんまり記憶になさそうだから多分がつりは聞いていないのだろう。

銀時が知らんぷりを決め込んでいると、うんうん唸る新八に神樂がかみ付く。

「知ったかぶりで物語に絡もうとしても無駄アル！お前なんかが銀ちゃんの昔の知り合い知ってる訳ないネ！」

「神樂ちゃん、記憶の隅にすらないから悔しいんだ」

負け惜しみ？と新八がニヤニヤ笑って神樂を見遣ると、神樂は急に冷たい視線を新八に向けた。

「やだ。何ニヤニヤしてるのあの人。気持ち悪いこっち見ないで」

「何で急に標準語オ！？」

その後、イラつとした神樂が新八に攻撃して、とばっちりをくらった桂が暴れだして…。

万事屋は一気にギャーギャーとうるさい空間になる。

そんな中ただひとり我関せず、という顔で銀時は窓の外を眺めて呟いた。

「光の弟ねえ…こりや本当にスパイかもね…」

尾行

何となく目が醒めて、土方は寝転がったままぼんやりと空を見つめる。

だいたいいつもは朝から晩までくたくたになるまで働いていたのに、急に四六時中寝っぱなしのこんな病人生活だ。夜だからって寝れる訳がない。

何気なく目を遣った時計は、丑三つ時を示す。深夜二時だ。

あ、オバケの時間…。
いや信じてないけどねっ！

ここ、大部屋だし。皆いるからいざとなったら…。

いや、いざって何？何もないし。このくらいの時間でもよく仕事してるじゃん。巡回とかもひとりで行くじゃん。

アホらし。寝よう。

しかしあれだな。夜の病院ってのはまた…。

いや、関係なくね。

まだ夜勤のナースさんも起きてるし、街では酔っ払いも騒いでんじやん。

起きてんの俺だけじゃないし？…だよな？

いやいやいや、誰も答えていないからね！？

自問自答だからね！

どこからともなく返事が返ってくるとかいらなから、ホント！

土方がひとりでしょうもない葛藤を繰り広げていると、隣でカタン、と音がした。

えっ…まさか…？

土方はビビりつつも目だけでそっと隣を見る。

オバケじゃなかった…。

自分が起きていることを気付かれないように隣のベッドを見ると、

ちょうど一色が起き上がり、ベッドから下りるところだった。

廁か？

そうも思ったが、よくよく観察しているとどうやら違っらしい。

一色は入院着の上から羽織りを着て、財布を懐に入れて出ていった。

「野郎、こんな時間にどこへ…」

土方は呟き自分も羽織りを着て、一色を追うためベッドから下りた。

――。――。――。

夜中でもガヤガヤと騒がしい街、かぶき町。

飲み屋の連なる通りを、一色がふらふらと歩く。
その少し後ろ、土方がこっそり後をつける。

と、女がひとり、一色に近付く。

仲間か？

土方に緊張が走る。

息をひそめ、見守っていると…。

「隆ちゃん！久しぶりい！入院してたんじゃないの？？」

「抜けてきました。ユウコさんに会いたくて」

「やだあゝ超嬉し！」

女はキャツキヤと跳ねると一色の手を引き、そのままふたり、歓楽街へと消えていった。

女遊びかよ…。

まあそーだよな。怪我もしてないのに入院生活とか暇だよな。てゆーか仕事しろよ。夜中とか土方さん危ないよ。

いろいろ考えたが、なんだか馬鹿らしくなって土方はぐるりと方向転換した。

「帰ろ」

「あるえゝ？多串くんじゃなあゝい。何してんの？こんなところで何してんの？」

前方から来た酔っ払い…。そこらで安酒でも飲んでいたのだろう。顔を真っ赤にした銀時が近付いてきた。

最悪だ。

土方は眉間にシワを寄せ、顔を背ける。

「誰が多串だ。あっち行け酔っ払い」

「えゝ！冷たくね？多串くん冷たくね？」

「ちっ…ウゼーなこいつ。絡み酒かよ。あっ！あっちにいるの多串君じゃね？僕は人違いなんで。土方君なんで」

土方は適当に遠くの方で酔い潰れるオヤジを指差す。

銀時も土方の指の先を追い、歩いてはぶつかりを繰り返しているオヤジを視界に入れて面倒臭そうに目を細める。

「えっ、あゝ…。ちょっと遠いからいいわ。土方くんはいーわ」

「俺はよくねーよ。あっち行け酒臭え」

しっしっ、とあしらう土方の腕を銀時が掴む。
何だか今日はいつもに増して絡み方がウザい。

「えゝ一緒に飲もうよ」

「はア！？何でお前と一緒に飲まにやらねえんだ気色悪い！」

「たまにはいいじゃん。そーゆーの望んでる女子の方々もいるんだよん」

「どーゆーの！？」

そのままふたりが飲もう飲まないで揉めていると、ふいに土方の背にポン、と手が乗せられた。

「お兄さん。この天パの知り合い？」

振り返ると、そこにはねじり鉢巻きのオヤジ…。多分どこかの店の店主だろう。

「違…「そうです。僕のパパなんです」」

きつと面倒なことになる、そう確信して否定しようとした土方の言葉、銀時が遮る。

「何言つて…」

パパ、だア？

意味の分からない銀時の言動を問いただそうとした土方に、鉢巻きのオヤジが紙を突き出した。

領収書…。

「飲み代、まいどっ！」

「……………は？」

「何で俺がてめえの飲み代払わねえといけねーんだっ！」

不当な請求に初めは拒否を示した土方だったが、店主の、警察呼ぶよ、の一言に結局折れた。

警察の自分が警察沙汰、しかも世間で無能だなんだ騒がれているこの時期に、誤解であっても変な揉め事は起こせない。

「そう言いつつも奢ってくれる君が好きだよ俺は。じゃ」

銀時は先程とは打って変わって、サッパリと別れを告げると土方に背を向けた。

「待てコラ」

今度は土方が、銀時の肩を掴む。

「何？やっぱり一緒にいたいのか？残念だけど銀さんノーマルだから」

「俺もだし！違えよ！金は返せよ！？ちよつと一筆書いていけ」

「何？細かいキモい。男ならあのくらいの金額でグチグチ言っ
なよ」

「てめえなんか奢る金は一銭もねえ！しかもお前結構な額だった
ぞあれ！」

「まあそつ興奮するなよ。傷が開くよ」

銀時はそう言うと、ポン、と土方の包帯だらけの胴体をつついた。

「……っ！」

「わっ痛そう」

「て、ん、め……っ！」

すました顔をしていても、やはり相当痛いらしい。傷口を押さえし
やがみ込む土方の肩を優しく叩き、銀時はもう一度背を向けた。

「まあ何でこんなところにいるか知らんけど、怪我人は病院に……」

去って行こうとした銀時が、急に立ち止まる。
土方は不審に思い、銀時を見上げる。

「どうした？」

—！

見上げた土方の目に映ったのは、この間よりは少ないが十数人、ずらりと並ぶ浪士たち。

土方は立ち上がり、小さく舌打ちをした。

「ちつ。またかよ」

「…物騒だね」

巻き込まれる空気ふんぷんで、銀時も顔をしかめて呟いたのだった。

尾行（後書き）

オバケの話はよく私が思うことです（^^笑
怖いよね…オバケ

怪我人と酔っ払い

ホントついてない。

無駄な散歩をさせられ、嫌いな銀髪に絡まれ、飲んでもねえ酒の金を払われた。

で、極めつけはコレだ。

「土方十四郎だな？」

ずらりと取り囲む浪士たち。皆ガタイのいい奴ばかりだったが、今回の奴らはいいい武器なんかは持っていないようだった。

ボロボロの刀を向けられて、土方は苦し紛れにうつすら笑った。

「さアな。武士なら自分から名乗りやがれ」

「じゃ、頑張つて土方くん」

また土方の肩を軽く叩くと銀時は、何事もなかったかのようにその場を離れようとする。

「いやいや、ちょっと待てば？」

「え、だって俺呼びじゃないみたいだし」

「だからってこの状態で怪我人置いてくか普通！？」

土方は、心底面倒臭そうな顔で振り返る銀時に若干苛つきながらも引き止める。

こんな奴でもないよりはマシだ。

「うるせーなあ銀さん酔っ払いなんだよ！実はさっきから吐きそうなんだよ！…という訳で」

そう言い残すと、結局銀時は土方の手を振り払いさっさと行ってしまった。

「ちっ…薄情な奴だ」

とりあえず一部始終を見守っていた浪士たちだったが、痛みに顔を歪めながらも構える土方を見て口々に嘲笑を始めた。

「ぎやはは！鬼の副長様が怪我してるって本当だったんだなあ」

「お仲間にまで見捨てられちゃって…運も人望もないね」

「仲間じゃねえよ」

土方は、ぐっ、と刀を構え直す。
病院で寝ている時はさほど感じなかったが、やはり少し動いたせいか目の前が揺れた。

浪士たちはゲラゲラと笑いながら振り下ろされる土方の刀を避ける。

「当たたりつませえ〜ん」

「こつちこつち！」

「残念！ハズレ〜」

浪士たちはひとしきり楽しむと、そろそろ頃合いだ、と刀を構えた。

「あばよ！鬼の副長さん！」

一斉に振り下ろされる刀、刀、刀。

とてもじゃないが防ぎきれない。
土方は固く目を閉じた。

ガッ

鈍い音がして、ぎゃあ、という男の声が聞こえた。

何だ？

土方は閉ざした目をそつと開けた。

「しゃーねえな」

「てめえ…っ！」

目の前には、先程自分を置いていったはずの薄情な背中があった。そして周囲には木刀で殴られて吹っ飛ぶ数人の浪士たち…。

「さすがに放つたらかしはハートが痛むわ」

銀時は驚く土方の方などちらりとも見ずにそう言つと、木刀を構える。

「な、何だア？酔っ払いひとり戻ってきたところで…」

一瞬…。

男は話し終わる前に吹っ飛んでいた。

少し怯んだ浪士たちだったが、一応は武士の端くれ。緩んだ頬を引き締め、逃げずに銀時に飛び掛かった。

ひとりと数十人、刀と木刀、後ろには怪我人、

明らかに不利なはずなのに、銀時はまるで赤子でも相手にするよう
に次々に浪士たちを吹っ飛ばす。

一方対する浪士たちは、銀時の動きに全くついていけず何もするこ
ともなく吹っ飛んでいく。

強い…。

単純に、そう思った。

一度手合わせして以降はこいつが戦うところをまじまじと見たこと
はないが、
時折空気が、というか所作ひとつひとつに“ただ者ではなさ”を感じ
られることがあった。

しかも浪士を吹き飛ばすたびに銀髪が揺れて、それが月明かりでき
らきら光るものだから不覚にも、綺麗だ、なんて思ってしまう。

おゝい？と顔の前で手をパタパタとはためかされて、土方は、はっとして辺りを見渡す。

どうやらぼんやり考えている間に片は付いたらしい。

あちこちに倒れる浪士たちの真ん中で、銀時は木刀を腰に差して二やりと笑った。

「これで借金はチャラな」

動いて酔いが回ったのか銀時は口元に手を当て気持ち悪そうに、うえつぶ、と言うと、ひらひらと手を振り、放心する土方の横を通り過ぎていった。

「…だからって五万はねえよ」

土方は呆れぎみに去っていく背中に呟いた。

そんな様子を見つめる影がもうひとつ。

「あれは…あの人は…」

——白夜叉…。

勧誘

「ホラ、あそこ。あの長髪よ」

とある飲み屋。

派手な女が男の腕に絡み付きながら、カウンターで飲む“長髪”を指差す。

「見つけるの大変だったんだからア」

「ありがとうございます。ユウコさん」

「他ならぬ隆ちゃんの頼みだからねっ。そのかわりまたお店に来てよね」

女はウインクすると男の腕から離れ、夜の街へと帰っていった。

女を見送って、男は白い変わった生き物を連れた長髪に近付く。

「桂小太郎さんですか？」

「何者だ？」

少し前から視線を感じていたのであろう。

桂は特に驚く様子もなく背中越しのまま問い返す。

「真選組五番隊書記、一色隆太郎です」

真選組、という単語にさすがに少し驚いて、桂がやっとうっすらと警戒の色を見せる。

「ただの隊士がひとり、俺を捕らえに？」

「いいえ。少しお話がしたくて」

「話？」

につこりと笑う一色の真意が読めずに桂が顔をしかめる。

なんて胡散臭い笑顔だろう…。

桂はまた少し、警戒を強めた。

「ぜひ貴方に協力していただきたくて」

「何をだ」

「真選組の…殲滅です」

「…！」

真選組の一員と名乗った男が、真選組を潰すと言う。

どこかしらの組織の密偵だろうか。
怪しいことこの上ない。

訝しげに睨む桂に、一色は向けた笑顔を崩すことなく続ける。

「貴方たちもそれを望んでいるでしょう？」

いくら観察してもその裏の感情を読み取ることができない目の前の男に、桂は諦めて、ふっ、と息をついた。

「一色、といったか。お前自身の目的を聞こうか」

「どうせすぐ調べられるでしょうから言いますね…。僕は、朝廷の使者です」

一色は問われて特に躊躇するでもなくあっさりと答える。
やはり、本当か嘘かは分からないが。

「成る程。真選組を、幕府を倒して政権を天皇の手に、というところか」

「ご明答」

それで倒幕を目論む攘夷志士と、か…。

桂は呟くと、一色を見上げ挑発するように口角を上げる。

「俺はこの国を朝廷にやる気もないぞ」

「でしょうね。ですから一時手を組むだけです。幕府解体まで、でいいでしょう」

一色も挑発に答え、不敵に笑い返す。

桂は作った笑顔を消し、一旦目を閉じて今度は一色を軽く睨んだ。

「どちらにせよ怪しいな」

「素性ならいくらでも調べて下さい。僕は急ぎませんから」

「そうさせてもらおう」

一色は、ずっと自らの携帯の番号を渡すと、では、と言、店を後にした。

【桂さん…】

傍らで見守っていたエリザベスが不安げにプラカードを上げる。

「なアに。あんな若僧に足をすくわれたりはせん」

―だがまあ、奴の背後にあるものに睨まれると、ちと厄介だな…。

桂は一色の去っていった店の戸口を睨み、密かにそう思った。

憧れ、幻滅

昨日はタダ酒を飲めたし、今日久しぶりに舞い込んだ仕事はなかなか割のいいものだった。しかも帰り道では結野アナとすれ違った。

今週の俺ツイてる。

そう。パチンコ屋に入るまでは。

生活費と従業員たちの一応の給料を差し引いてせつかくできた小遣い…。

銀時は軽くなった財布片手に大きいため息をついた。

大人しく帰ろう、そう思って原付にまたがった。

しばらく走ったら、信号に引っ掛かった。

これを渡ればもう家に着く、というところで不吉なものを発見する。

黒い制服、腰には帯刀…。巡回中の真選組隊士らしい。

別になんも悪いことしてないのに警察を見ると目を伏せてしまうのは何なんだろう。

あ、違った。俺この間原付のライトぶつけて壊れたままだったんだ…。

案の定、隊士は近付いてくる。
待って待って。あれ、手信号するから。あれやってる奴見たことないけど。

「ごちゃごちゃ考えているうちに隊士はすぐ横まで来ていた。

突き刺さるような、視線。

だが、隊士は一向に声をかけてこない。
不審に思っ、銀時が顔を向けると、隊士がぽつりと呟いた。

「白夜叉…」

「！」

チビでくせ毛のその隊士は、でかい目でこちらを見つめてくる。

銀時が惚けて、意味が分からない、という表情を作ると、隊士はもう一度、今度はしっかりと問いかけた。

「お兄さん、白夜叉でしょ？」

「知らねえな」

銀時はちよつと眉を寄せ、今度は強く否定する。
だが、隊士も引かない。

「僕、見たんですよ。あなたが昨日、刀を振るうところ」

「…だから？」

昨日つてアレか。土方君庇つてあげたやつか。

銀時が酔つて朦朧とした記憶を思い起こしていると、隊士はこちらを見据えたまま続けた。

「鮮やかな太刀筋…月明かりできらきら光る銀髪、舞い散る血…兄から聞いていたままです。…坂田さん」

最近自分を“坂田さん”なんて呼び方する奴は、そうはいない。
それに隊士の顔には何となく見覚えがあった。

長い睫毛、大きな目。女みたいな顔立ちに癖のある髪…。
身長は小さいが…。

「お…前…っ！」

銀時が、思い出したように目を見開くと、隊士はにっこりと笑った。

「はじめまして坂田さん。僕は貴奇猛。兄がお世話になりました」

少前、桂と話していたところだ。

短い間だったが攘夷戦争を共に経験した同士で、今はもうこの世にいないかわい後輩、貴奇光…。

「光の…弟か」

もうなくしたと思っていた笑顔とそっくりの笑顔でこちらを見上げる猛に、銀時は複雑な表情を向けた後、そのまま前方に見える職場兼自宅を指差した。

「…そこ、俺ん家なんだ。上がってけよ」

――。――。――。

「どつぞ」

接客対応はお手の物。いつもの如く新八が家主の連れてきたお客様に茶を差し出す。

「ありがとうございます」

そう、にこりと笑う猛はまるで女の子みたく新八は思わず、とき

りとしてしまふ。

「あ、ど、どういたしまして」

「なに男相手にどもってるアルか。キモっ」

新八が挙動不審になっている様子に、本物の女の子、神楽が冷めた目を向ける。

新八は顔を真っ赤にして、うるさいなっ、と一言残すと、お盆を戻しに台所へ消えていった。

「そーだ。お前の兄貴に預かってるモンがあるんだ」

「？」

銀時は思い出したように言うと、窓際の自分の机の引き出しの奥をがさがそ探り出した。

「戦争が終わってから色々搜したんだけどよ、場所分かんねえし旅する金もねえから結局渡しそびれて…あ、あつたあつた」

ほれ、と銀時はしわくちゃでところどころ汚れた紙を猛に手渡す。

「…手紙？ですか？」

「汚れちまって悪イけど」

受け取った手紙には、泥汚れに混じって血のようなシミも見られて、これが書かれた時の戦いの凄まじさを感じられた。

ボロボロの手紙を手に、猛が懐かしそうに目を細める。

「兄貴、戦地から何度も手紙くれたんですね…拠点がコロコロ変わるから俺からは出せなかったけど」

「危ねエからやめろって言ったんだけどな」

猛は手紙を懐にしまい、ため息混じりに笑う銀時に言った。

「聞かせて下さい。兄貴の話」

――。――。――。

今日初めて会ったふたりは、共通の人物の話題で盛り上がる。もうお茶も三杯目にもなったところで、一息ついた銀時が急に真面目な顔で猛に尋ねた。

「んで、何で真選組？」

「……………」

先程までは談笑していたのに、猛が急に黙る。

まあ、だいたいの動機は分かる。

銀時は眉を下げ、諭すように言う。

「しょうもない怨恨ならやめとけよ。時間の無駄だ」

そのまましばらく黙っていた猛だったがやがて絞り出すように、ぽつり、と小さく呟いた。

「…何ですか？」

「ん？」

「何で…そんなに割り切れるんです」

銀時は小さく息を吐く。

ここにも、過去に囚われた者がひとり。

「…今更…どうするってんだ。もう終わったことだろ」

「でもっ…！」

猛は続けて何か言おうと銀時を見てすぐに口ごもると、はあ、とため息をついた。

「……がっかりしました。兄貴が憧れていた坂田さんがこんな腑抜けだったなんて」

「何とでも言えよ」

ちよつと怒ったように言う銀時を一瞥し、猛は、失礼します、と玄関への引き戸に手をかける。

が、言い残すことがあったようで、そのまま扉を開けようとした手を止め顔だけこちらを振り返った。

「そうだ。桂さん、朝廷側と手を組むらしいですよ」

「……ッラが？」

びっくり、と銀時が反応するのを確認し、猛は今度こそ扉を開けた。

「それじゃ」

お茶のおかわりを注ぎにきた新八とうたた寝していた神楽が、突然帰る猛を不思議そうに見つめるなか、銀時はひとり、渋い顔でまたため息をついた。

「まったく…面倒臭えな」

憧れ、幻滅（後書き）

コミックス読んであらってなっちゃったんですが、まだ

銀さん〃白夜叉

バレはしてないって設定で。この世界では。

腹の探り合い

「まだ早いですよ！」

甲高い看護師の声がして一色が目を醒ますと、隣のベッドで隊服に身を包み身支度をする土方の姿が目に入った。

「…もう退院ですか？」

「いつまでも寝てられねえだろ」

まだ傷が治りきっていない、再三止めた看護師だったが、何を言っても聞かない土方についに折れて、ちゃんと毎日通院してくださいね、と念を押して部屋を出ていった。

「じゃあ僕も退院ですね」

一色の任務は土方の護衛。土方が退院するならここにいる意味はない。

一色はさっさと出ていこうとする土方を引き止め、自分も身支度を始めた。

「お前、天皇の血筋なんだったか」

待たされて退屈な土方が、ベッドに腰掛け話しかけてくる。

「ええ。一応は」

「一応？」

一色は準備をしながらも土方に目を向け、話したした。

「前天皇、今は上皇ですが…あの人が今の皇后とご結婚される前にちよつとだけ手を出した下働きの娘、それが僕の母です」

「…って、じゃあお前一応どこるか、現天皇の兄貴か!？」

さすがに少し驚いた様子で土方がさらに問うと、一色はにっこり笑って、まあ…そうですね、と曖昧に頷いた。

「そんな由緒正しい血統のお前が何で真選組こんなとこに入った？」

しばらく黙って、土方は訝しげに一色を薄く睨む。

一色は気付くか気付かないくらい、一瞬眉を寄せるとまた笑った。

「天皇の兄と言っても下賤な庶民の娘との子ですから。僕のことを知るのはごくごく一部ですし、僕が朝廷あそこで権力を持てることはないんですよ。だったら江戸に出て自分の力を試そうかと思った、そんな感じですかね」

また何を考えているのか分からない笑顔だ。
きつとこれ以上は聞き出せない。

土方はわざと興味なさげに視線を逸らした。

「ふうん…。こっちは血生臭いぞ」

「そうでしょうね」

準備の終わった一色は律儀にベッドを整えると、お待たせしました、と土方に告げる。

立ち上がり、病室を出る土方の背中に一色が呟く。

「聞きたいことはそれだけですか？」

びたり、土方が立ち止まる。

「何でも教えてくれんのか」

「プライベートは教えませんよ」

一色はきつともう自分が疑われていることに気付いているのだろう。

そして、自分が気付いていることを土方に気付“かれて”いると知って、こんな質問をする。

挑発するような一色の態度に、土方は、くい、と口角を上げて言う。

「本当は誰に何を言われてここに来た？」

「それはプライベート、秘密です」

疑われているという事実が確信に変わる。

一色は爽やかに笑って質問を流す。

予想通り期待はずれの返事が返って来たことを、土方は、ふん、と鼻で笑うと病室を後にした。

ドS帝国

―局中法度第十二条、マガジン以外の漫画局内で読む事なかれ―

「な…何だこれは」

屯所に帰ってきた土方が目にしたのは、散乱するジャンプ、散らかった部屋、そしてなぜかそこかしこにきらびやかに飾られた沖田の肖像…。

土方が口をあんぐり開けて目を白黒させていると、前方から近藤が、はっはっは、と笑いながら近付いてきた。

「トシ！やつと帰ったか！やはりお前がいないと散らかって駄目だなあ！」

「散らかってるつつつか…何で数週間でこんなになるんだ」

何これ。総悟の城？

以前（イボ視点で）見たイボの織り成す世界ほどではないが、屯所は確実に沖田色に染まっていた。

沖田の写真、像、絵…。

さらに副長室の入口には“沖田”と大きく名前が貼られていた。

土方がそのまま啞然としていると、傍にいた隊士たちが急に屯所の門に向かって仰々しく敬礼をしだした。

「『沖田副長代理！お帰りなさいませえ！』」

門から入ってきたのは沖田。横に従者^{バシリ}を連れ、敬礼した隊士たちを鋭く睨む。

「お。代理はいらねえって言っただろうが。殺すぞウジ虫。（代理）くらいにしとけ。どーせもう土方は帰ってこ…」

「誰が帰ってこねえって？」

さすがに黙って見ていられず土方が口を挟むと、沖田はあからさまに残念そうな顔をした。

「あれ。土方さん。もう帰って来たんですか…ちっ」

「舌打ち!？」

「副長お～～!!お帰りなさ～い!!」

「今まで厳し過ぎるんじゃないマヨネーズ星人とか思ってたごめんなさい！」

ウジ虫呼ばわりされていた隊士たちが土方に飛びつき、泣いて喜ぶ。

「痛え痛え！まだ傷塞がつてないんだって！……てゆーかお前らいたいどんな仕打ちを受けたの。あと今さりげに酷いこと言ったね」

飛びかかる隊士たちを引きはがす土方を恨めしそうに見遣り、沖田はため息をつく。

「あゝあ。せつかく総悟・ド・S帝国をつくろうと思ってたのに」

今まで四人の新人隊士を疑ぐっていたが、こんなところに伏兵がいた。

土方の復帰にすっかり感を毛ほども隠すつもりのない沖田を見て、土方は皮肉を込めて言う。

「もしかしてお前が俺の命狙ってんじゃないかねえの」

「えっ。いつも狙ってやすが」

けろり、沖田が答える。

「あ、そうだった。ハハ」

「そうでさア。いやだなあ土方さんってば。ハハハ」

あっはっはっは…

「ちょっと来い」

土方が沖田の首根っこをがしりと掴む。

「帰ってくるなり便所リンチですかイ？陰湿」

「お前ホントむかつく」

土方は怒りを通り越して呆れた表情を浮かべ、きやーたすけてー、なんて棒読みで言う沖田を引きずって自室へと入っていった。

―・―・―・―・

「何か動きはあったか？」

久しぶりの煙草を堪能し、幾分機嫌の治った土方が沖田に尋ねる。
沖田は引っ張られてシワになった隊服の襟を整えながら、面白くなさそうに答えた。

「なぐんにも。あ、でも中央に行ったとき…天人に釘をさされました。あんまチヨロチヨロすんなって」

「誰を調べてる時だ？」

「花井」

土方は眉を寄せ、斜め下を睨んで含んだ煙と共に言葉を吐き出す。

「やつぱりあいつも臭えな」

「えっ。土方さんよりも？」

「臭いじゃねえよ！まだマヨネーズのこと言う！？」

せっかくのシリアスモードをぶち壊す沖田にキレぎみに突っ込む土方だったが、当の沖田は突っ込みを無視して自分だけシリアスモードを続ける。

「てゆうか大丈夫なんですかイ？足手まといはごめんですぜ」

「大丈夫だ。無理はしねえよ。それに副長の俺ならまだ中央にも入り込みやすいだろ」

「ああ、職権濫用ってやつですかイ？」

「違えだろ！それは権力を私利私欲に使うことを言うの！」

もうヤダこいつ…。

傷だらけのこの身では突っ込むのすら辛い。

もうちょっと怪我人を労ったらどうなの、なんて思っている土方の気なんて知ろうともせず、沖田は、ふわぁ、と欠伸なんてしながらきよるきよると辺りを見回した。

「まアいいですよ別に何でも。ところで山崎は？」

土方は、ふ、と息をつくと諦めたように目を閉じた。

「何かモタついてるとかで帰るのは明日だと」

「じゃーまアあとは山崎が帰ってからですねイ」

そう言ってさっさと出ていく相変わらぬ沖田を見送り、土方またため息をついた。

思案する者、断る者

二番隊隊舎…。

ここには関係のないはずの五番隊の金髪が賑やかに駆ける。

「は～な～いくんっ」

出来るだけ関わりたくないやかましい金髪に捕まったのは、二番隊副官補佐、花井新太。

彼はそのでかい身長のせいでいやでも目立ってしまっ。

「ええと、瀬戸君、でありますか？」

「そ～そ～。ちょっと話そっや」

「は、話？」

嫌な予感しかない瀬戸の申し出に、思わずしかめた顔を隠せずに少しどもる。

そんな花井の様子は特に気にせず、瀬戸は、にかっ、と笑った。

「おう。ホラ花井君んとおのんは老中、うちのおのんは法務省の大臣…どっちも幕府中央関係者やん？」

「あ、まあ…」

「あ、老中の方が上じゃボケ〜とか思った？」

「いや、そのようなことは…」

終止苦笑いをする花井に、瀬戸は今度はちよっぴり、意地悪に笑う。

「なあ、花井君ってなんでできひんフリしてんの？」

「おっしゃる意味が分かりませんが」

眉根を下げ、困惑したような表情をつくる花井に、瀬戸はさらにニヤニヤ笑って言う。

「またまた〜。ホンマは頭イイクせに。あ、ずる賢いって言うんかな」

「…何なんですか？」

無遠慮に絡まれて、温厚に振る舞っていた花井がさすがに少し迷惑そうにつり目を細めて瀬戸を睨む。

当の瀬戸は、ぷっ、とおちよくるように笑うと、真っ直ぐ花井に視線を投げかけた。

「俺と組まへん？」

「組む？」

怪訝そうに、花井が首を傾げると、瀬戸はひと呼吸置いて急に笑顔をどす黒いものに変える。

「父親に言われてんねやろ？真選組潰せ！ゆうつ」

「な、何を…っ」

焦る花井を見て瀬戸はまた、へらりと笑うと花井の肩を馴れ馴れしくぽんぽんと叩いた。

「ええやんええやん。俺もやから。正味ひとりやったらしんどいと思つててん」

「瀬戸君は…真選組が邪魔、なのでありますか？」

「ん？んゝ俺ってゆーかうちの親がな」

花井は悩んでいるのか地面を睨んで、それから瀬戸を真っ直ぐに見

る。

微かだが、目の色が変わっている。

「僕と組むのは…ご両親の指示で？」

「うん。そんな感じやな」

猜疑心の強そうな顔やな。

瀬戸は笑顔の奥で密かに思う。

一方は笑顔、一方は疑いの眼差しでしばらく睨み合った後、この妙な空気を断ち切ったのは花井だった。

「僕も父と…相談しても？」

相変わらず疑っている様子で、花井が言う。

考える時間が欲しいってことな。

瀬戸は、にこっとできるだけ爽やかに笑って、ええよ、と返事をした。

――。――。――。

人氣がなく、真っ暗な夜の道。切れかけた街灯がチカチカ光る度に側溝に佇む髪の長い男の姿が見える。

どうやら電話をしているらしい。

『返事を?』

電話口からどこか楽しんでいるような声が聞こえる。

男も相手の様子を感じ取り、少し笑って言う。

「ああ。結論から言うと、お断りだ」

『何故?』

電話口の男は男の答えを予想していたらしく、さして驚く様子はないが、要求が通らない事に少し不満げに尋ねた。

「俺は権力争いをしたい訳じゃない。それに“兄弟喧嘩”に巻き込まれるのも御免だ」

『…さすが、調査がお早い。それで、調査が終わっても京にいる理由は?』

「なアに。彰治殿に挨拶でも、と」

男が不敵に笑うと、電話口からも、クク、と声が漏れる。

『させるとお思いで？』

「簡単には行かんだろうな。でもあの日からつけられ続けてそろそろうんざりしていた」

男はある日からずっと背後にある気配を睨む。

気配の主は日ごとに代わっているようだが、つかず離れず、それは男に付き纏っている。

今まではただ見ているだけ、という風だったが、この電話を切ってしばらくしたらきつと、気配は敵意あるものになるだろう。

『夜道、お気をつけて』

電話口の男はそう残し、電話を切る。

男は、ふっ、と息をつくと、闇夜に薄く光を放つ京の中心、御所を見上げた。

思案する者、断る者（後書き）

お分かりでしょうが後半のふたりは、桂さんと一色です。

桂さんは京都で一色の素性調査をしました。

依頼主

久しぶりに依頼主が訪ねてきたというのに、部屋には気まずい空気が漂う。

上座には微動だにしない白い鳥の化け物。
対面に座る万事屋三人は、ひそひそと相談を始める。

「おい！どーすんのコレ！来た途端だんまりだよ！デジャヴュだよ！」

紅桜の件では、無反応だったエリザベスを前に早々に逃げ出した銀時だったが、今回は両隣のふたりにがっかりと押さえ付けられる。

「いちご牛乳出すアル！きつとまた泣いて喜ぶネ！」

「いや喜んだのかなアレ…でも出してみる？」

そう。あの時は苦肉の策で出したいいちご牛乳で、やっと反応を示したエリザベス。
また試してみるか、と台所へ向かおうとする新八の着物の裾を、銀時が掴む。

「ふざけんな馬鹿！あれはやがて銀さんの体液になる命の聖水なんだよ！てかまたって何？前にも出したの？」

「ちっ…小さい男アル。いちご牛乳のひとつやふたっ…」

いちご牛乳ひとつで必死な銀時に、神楽が舌打ちすると、

「じゃあてめえ酢昆布献上しろよ!」すっぱ『って言うかもよ!」

銀時も大人げなく応戦する。

「嫌アル!酢昆布は私の中を流れるなんかよく分かんない汁になるアル!」

「ちょ、やめなよふたりとぶほっ!」

しょうもなく卑しい争いのとばっちりを受けた新八が吹っ飛ぶと、ちょうどエリザベスの足元に落下する。

ぼとり、頭上から雫が舞い落ちる。

涙だ。

「エリー?」

神楽が心配そうに言うと、エリザベスはようやく、すっとプラカードを掲げた。

【桂さんが…】

「？」

【桂さんが、消えた】

「消えた？」

「ホントアルか？エリー」

こくん、とエリザベスが頷く。

「どーせまたどつかでスタンバってるだけじゃねえの」

銀時はエリザベスを胡散臭そうに見て鼻をほじる。

そんな銀時の態度に神楽が怒りだす。

やっぱり女子供は動物（？）には弱い。

「銀ちゃんネリケシーがないアル！それにいつもはエリーも一緒だったネ」

神楽の意味不明な単語に迷うことなく、デリカシーな、と返し、銀時は目を細める。

さすが親子（もどき）。

「懐かしいな〜ねりけし。金持ちはカラフルな匂い付きを持てるけど俺ら貧乏人は消しカス集めてねりねりねり自家製だよ？真っ黒になった汚え塊を大事に机に置いてたら母ちゃんに捨てられるんだよっ！くっ…！」

「銀さん話逸れてます。あの…エリザベスさん、何か心当たりはないんですか？」

新八がさらりと突っ込んでエリザベスに尋ねる。

エリザベスは少し俯き、すっ、とプラカードを上げた。

【もしかしたら…】

「何かあるネ！？」

【この間、変な男に声をかけられて…】

「変な男？」

こくん、エリザベスはまた頷き、続けた。

【桂さんに、一緒に真選組を壊滅させようって…】

「真選組を…攘夷浪士ですか？」

あんな桂でも、倒幕を狙う連中の中ではカリスマ的存在のひとりだ。いろんなところからお声がかかってものなんらおかしくはないし、珍しくもないだろう。

だけど今回のお誘いはなにか違うらしかった。

【男は真選組の隊服を着て、自らを朝廷の使者と言っていた】

「！」

三人は驚き、目を見張る。

その中で銀時だけが、そういえば猛がそんな事言ってたな…、と先日进行い出していた。

「…チョーデー？」

驚いた割によく分からずに首を傾げる神楽に新八は、天皇陛下のいるところだよ、と答えてそのままエリザベスにさらに尋ねた。

「で、桂さんは朝廷と手を組むためにあっち側に行ってたって事ですか？」

【桂さんは断るつもりだった】

銀時が、ふつと息をつき言っ。

「まあ…簡単に断らせちゃくれないだろうな」

「じゃあ、ひとりでケリをつけに…？」

【多分…】

沈黙が漂い、しばらくして新八が、ん？と零す。

「てゆうか…真選組の隊服？」

聞き流していたけど、大事な点だ。
神樂が興奮ぎみに前のめる。

「スパイアルか！？」

「だろうな」

「銀さん…」

適当に返したら、みんなの視線がやけに痛い。
銀時は堪らずソファから腰を浮かす。

「…やだよ銀さん。朝廷とかコワイ」

「エリーがめっさ見てるアルよ！」

【そうだ、京都へ行こう！】

「どこの鉄道のまわし者！？」

知らない知らないと耳を塞ぐ銀時の横で、神楽が“京都”に反応を示す。

「京都！？行きたいアル！舞妓は〜んとあは〜んな遊びしたいアル！」

「なに？あは〜んって…」

呆れたように言う新八も、ちょっと“京都”の響きには魅力を感じるらしい。

ちらりと銀時を見る。

「吉原行ってくればいいだろ。もっとあっは〜んしてうつふ〜んしてくるよ！だいたいウチにはそんなところ行く余裕ありませんっ」

結局最後はお金の話に持っていく。

京都旅行なんて貧乏な今の万事屋には所詮夢物語だ。

の、はずだったが…。

【旅費なら出す】

エリ（鶴）の一声が、文字通り上がる。

「マジアルか！？行こう！銀ちゃん行こうよ！」

「えゝ…」

待ち構えていることは間違いなく面倒事だが、神樂のきらきらした顔と無料につられて、銀時たちは最終的には京都へ足を運ぶはめになるのだった。

依頼主（後書き）

私はカラフルなねりけしも持ってましたが、消しカスねりねりもしました。

最近のおもちやはすごいから今の小学生はねりけしなんかで遊ばないんだろうな…。

そもそもねりけしって何が楽しいんだろう。

京という土地

昔は京に行く、なんて言うの大層な準備をして何日もの旅になったものだが、文明の進んだ今となつては京都なんてものの数時間で着く。

だが万年金欠の万事屋にしてみれば、住み慣れた土地を離れて遠出することなんて滅多にないこと。

三人と一匹（？）は当初の目的を忘れて数時間、観光にふける。

「キャッホーイ！京都〜！」

「あゝあゝ。はしゃいじゃって」

呆れたように言う銀時の手には、ハッ橋、お抹茶、その他有名和菓子店の袋…。

そんな銀時の姿に、新八がもつと呆れて言った。

「銀さんだつて。あんなに嫌がつてたくせに十分満喫してるじゃないですか」

「銀さんは順応性ハンパないからね。来たからには楽しむの」

新八は、子どもなんだから、と笑うと、眼前に広がる京都の町並みを眺める。

「でも何かアレですね。建物なんかは情緒ある感じだけど、結構人がごった返して騒がしいですね。普通に派手な天人もいるし」

新八の言う通り、街は人で溢れ返っていた。

よく偉い人が高い建物やカラフルな看板が景観を乱すだなんだ言っているらしいが、一番景観を乱しているのはこのごたごたとした人ではないだろうか。

前方を駆ける神楽のこともしっかり見ていないと逸れてしまいそう……いや、隣に目立つ変な生物エリザベスがいるから平気か。

「まー観光地だからな。中心部に行くと大分違うよ」

銀時は若干うんざりしつつ新八に返事をし、無遠慮にぶつかってくるおばちゃんという種族に舌を鳴らす。

「来たことあるんですか？京都」

「…昔、一度だけな」

「？」

何か知った風に少し眉を寄せる銀時を新八が不思議そうに見上げたところで、前方の神楽がかい声をあげてこちらに手を振った。

「銀ちゃん！ぱつつぁーん！エリーがあっちだって！チョーテー！」

【早く来い】

「はいはい…ん？どうしたんですか銀さん？浮かない顔して」

また苦い顔をしてあさつての方向を向く銀時を、新八が怪訝そうに見つめる。

銀時は、別にい、と歯切れ悪く答えると、すぐに進行方向に視線を戻して、新八を追い越してさっさと行ってしまった。

不思議に思い何となく銀時の見ていた方に目を向けると、ヒソヒソと話す地元の人らしい二人組が目に入る。

二人組は新八と目が合つと、さつと目を逸らしてそそくさと行ってしまった。

「？」

新八がまた不思議そうに首を傾げたとき、前方から神楽の大きな声が響いてきた。

「何でアルか！？」

「いや、だからこつから先ガキは行けねえんだって」

どうしたの？と近付くと、神楽が不機嫌そうにこちらを向いた。どうやら銀時から突然、待機命令が出たらしい。話を聞いた新八も、抗議の声をあげる。

「ええ？未成年立ち入り禁止？そんな話聞いたことないですけど…」

ふたりして銀時を睨むも、その銀時も引かない。

「この先はディープでエロエロの世界なんだよ！童貞とガキには刺激が強すぎるのっ！」

「ぐぬぬ！ひとりだけ楽しんでくる気アルな！エロオヤジ！」

「そこ羨ましがるのなんかおかしくない？でも、中心部は上品で雅な感じでしょ？かぶき町の方がよっぽどいいかわしいと思うけど」

「これだから童貞は…経験あるフリしてネット発信のエロ知識披露して恥かくタイプだよ」

「しねーよ！んなことしねーよ！童貞馬鹿にしてんのか？あアん？」

理不尽な銀時にも落ち着いて反論していた新八だったが、ついに我慢できずに怒りだす。

しかし銀時は態度を改めることなく、すっ、と傍観していたエリザベスを指差す。

「ほら、エリザベスさん見てみるよ。余裕の表情だよ。ありゃ百人斬はいつてるね」

「くっ！いつもと同じ顔だけど余裕に見えるっ！男前に見えるっ！」

馬鹿な言い争いが延々続くかと思われた時、先程まで怒っていたはずの神楽が、ふっ、と呆れたように息をついた。

「もういいネ。さっさと行くヨロシ」

「神楽ちゃん？」

「なんか必死で子ども遠ざけてエロエロしようとしてるのが哀れアル。いつも変なところ扱い遣ってエロ本読むのも我慢してるみたいだからたまには行ってくればいいネ」

神楽は、しっしっ、と手をはためかせ、男前に背中を向けた。

「か、神楽ちゃん…っ！」

よ、余裕だ！

本当の男前居たっ！

その神楽の姿に、新八のみならず銀時も感服してキラキラとした視線を向けたのだった。

――

【悪いな】

「あ？」

エリザベスとふたりきりになってしばらくした時、ふいにプラカードが上げられる。

銀時は、ぴくりと少しだけ反応し、よく分からないフリで次の言葉を待ってみる。

【京都という地のことを忘れていた】

どうやらエリザベスも知っていたらしい。

「あゝ。知ってんのか。お前は？大丈夫なの？」

【人目気にしてたら国家反逆なんてできない】

「あゝ。まあ、そっか」

銀時は適当に返すと、嫌でも聞こえてくるヒソヒソ声に眉を寄せた。

見て見てあれ。天人やわ。

嫌やわ。何でこんなとこまで入って来たんやろか？

見て。あの髪の色。化け物みたいやわ。

怖いわあ。目、合わせたらあかんで。殺されてしまうわ。

あちこちから聞こえる嘲笑の声。蔑んだような視線。

今でこそ天人がでかい顔をしてそこらを歩いているが、かつて天人が地球に現れたてのころには“普通”と違う外見の天人たちは差別の対象だった。

力無き者は虐げられ、力を持つ者は恐れられ遠ざけられた。

古からの風習が色濃く残るこの京の中心地では、そんな醜い風習も今だに残っている。

そんな訳で、一般の天人はあまりここには近寄らないのが普通だった。

【一緒にいるせいであんたまで天人に見られるな】

隠す気などまるでないささめきに、エリザベスがばつが悪そうに告

げる。

「別にいいよ。気味悪いだなんだ言われるのは慣れてるし。でもガキにやちよつとキツイだろ」

銀時は、気にすんな、と笑うとすたすたと先へ進む。

そう。きっと神楽がここにいれば、酷く傷付いただろう。そして心優しい新八も。

前に行くもうひとりの心優しい背中を見て、エリザベスは、ふつ、と微笑んだ。

京という土地（後書き）

銀さんに対するエリザベスの口調が分からない…。敬語？

天皇兄弟

「ところでさ」

御所を目の前にして、銀時が呟く。

エリザベスは大きな目を向け、無言で続きを待つ。

「ヅラ誘ってきたのって“天皇の”使者か？」

【？】

「弟勢力じゃねえ？」

銀時の問いにエリザベスは、はっ、としてしばらくするとプラカードを上げる。

【確かに調査中、そんな情報もあがった。でもなんで…】

自分も途中までは、桂を誘ってきた怪しい男の素性調査に関わった。そこで浮かんだひとつの線。

それを銀時が知っているなんて。

驚いたように見つめるエリザベスだったが、銀時は、やっぱなぐ、と軽く返しただけで、早々に会話を終わらせてしまった。

「さうて。行くか」

完全に頭を切り替えて御所入口へと向かう銀時に、エリザベスも考えを御所侵入へと向ける。

【あの警備をどうするか…】

「あ、大丈夫大丈夫。ちょっとだけ待ってて」

普通の者が入れない場所だから隙を見つけて侵入を、と思っていたのに、銀時はそう言うところエリザベスをおいて正面入口、たくさんの警備に囲まれたそこへずかずかと進んで行った。

警備員が、近づく銀髪に警戒心を示す。

射殺されてもおかしくない状況だが、銀時の顔はへらへらと締めまらない。

銀時が一言二言話して、対する警備員が何やら無線機で確認をとる…。エリザベスが遠巻きにハラハラしながら見守っていると、銀時は、へらりと笑ってこちらに手を振った。

「おい、入るぞ」

妙な毛色の貧乏臭い男と、これまた妙な宇宙生物。

先導する従者も屋敷内の貴族連中も、廊下を歩く銀時たちを訝しげに見つめる。

【お前何者だ…？一般市民が御所に入れるなんて…】

「ヅラと一緒にいるのに知らねえの？でもまあわざわざ会話にあげるほどでもねえか？」

銀時は、意外だというように目を見開いたあと、すぐに死んだ魚の目に戻る。

ここの誰かの知り合いなのか？桂さんも？

やはり彼らの交遊関係はよく分らない…。エリザベスが考え込んでいると、先導の従者が急に立ち止まった。

目の前には、繊細な装飾が施された部屋の入口。

従者が、すつ、と一歩横に避けると、銀時は少しも遠慮することなくずかずかと部屋に入っていく。

「うーす。アッキー。お久々」

無駄に広い部屋には、座椅子に座った十六、七の青年がひとり。きらびやかではないが一目で上質だと分かる衣装に、上品で端正な顔立ち…。

国民なら一度は見たことのある顔、彰治天皇その人だ。

「銀時。よう来たな」

不躰な挨拶をかます銀時に、彰治は穏やかに返す。

【知り合いか？】

驚いてエリザベスが尋ねると銀時は、おう、と短く答えて続けた。

「こいつがガキン頃に助けてやったんだよね」

「ああ。戦時、数日世話になった。命の恩人じゃ」

今まですれ違ってきた貴族連中と違い、彰治はエリザベスを目にしても表情ひとつ変えない。

むしろ客人を迎え入れる笑顔、敬意を払うような態度…。

さすが天皇、とでもいふべきか。

そんな、この国で一番礼儀正しく由緒ある血筋の彼とこの下品で無作法な銀髪に繋がりがあるなんて。

エリザベスが失礼な事を考えていると、彰治は何故だか少し、悲哀を込めて笑った。

「お前はもう京には来てくれんと思ったぞ」

銀時も片眉を下げて困ったように笑う。

「まあ…ちょっと用事があつてな」

「用？」

首を傾げる彰治に、銀時は、そうそう、と頷くと、本題に入った。

「ヅラ来てねえ？」

「小太郎？来ておらんが…？何かあつたか？」

やはり、来ていなかった。銀時とエリザベスが顔を見合わせる。

黙り込むふたりを見て、彰治がもう一度尋ねる。

「何があつた？わしに力になれることなら言ってみよ」

銀時は黙り込み、しばらくして口を開く。
だがそれは残念ながら質問の答えではなく、また質問だった。

「弟くん、元気？」

「相変わらず話が飛ぶの。孝暗なら昔のまま。わしと目も合わせぬわ」

彰治は自分勝手な銀時に呆れたように笑うと、苦い顔で弟、孝暗の近況を告げた。

「氣いつけた方がいいぜ」

急に少し真剣に言う銀時に、彰治は、ふん、と鼻を鳴らす。

「だてに何年も狙われておらぬ。じゃが…確かにあやつ、最近不穏な動きをしているようじゃ。昔のようにお前が力になってくれるなら心強いのだが。のう、銀時。どうじゃ？」

やはり弟勢力が動いているのは間違いないようだ。
そして、彰治もそれを知っている。

冗談混じりに、しかしあわよくば現実にしたいたいという願望を向けられ、銀時は、勘弁してくれ、と困り顔を作る。

「ワリーけど。今は他でいっぱいいだ。それに俺なんか傍においたらまたネチネチ言われるよ」

「言わせんさ」

「言わないだけだろ」

彰治はしばらく銀時に目で訴えかけていたが、やがて折れて、ふつ、と息をついた。

「忠告、礼を言う。そちらにもなるべく危害が及ばぬように取り計らおう」

「どーも。でも保身を第一に考えろよ。あんたもつ天皇なんだから」

「分かっておる」

銀時が、協力はしてやれねえけど、と付け足すと、彰治は残念そうにまた笑った。

天皇兄弟（後書き）

銀さんたちがどんな感じで天皇と知り合ったかは何となく考えてますが、本編で書くかは微妙です。

とりあえず何か昔助けたくらいに思っただけ…。

ちなみに天皇兄弟の名前は明治天皇と孝明天皇をもじってます。

壊すのは（前書き）

京都に潜伏している“あの人”が登場。

壊すのは

繁華街から離れて、いつもは静寂なはずのそこ。
金持ち、貴族が集う京の中心地区の一步手前。

今夜のそこは少し騒がしい。

う、とか、ぐあ、とか呻いて、背後の旅館らしい建物を護るように配置されていた男たちが地に伏す。

自分が斬ったそれらを通り抜けて黒い隊服の少年はそれらに護られた男の元までたどり着いた。

「また、満月にじゃじゃ馬か」

部屋の窓の棧さんに腰掛け、月見なんて決め込んでいたその男。

自分の部下たちがいと簡単に蹴散らされたというのに、自分たちの敵である警察の制服を着た少年が現れたというのに、男は余裕たっぷりに笑って言った。

男の片目は隠され、睨まれる目玉はひとつだけなのに、まるでたくさん目の目に睨まれているかのようなプレッシャーを感じて少年は少し萎縮する。

が、用があるなら話せと睨む目が告げているようで、少年は意を決して話した。

「ごめんなさい。手荒な真似して。貴寄猛です。はじめまして高杉さん」

珍しく、高杉が一度だけ驚いたように瞬く。そしてすぐにまた笑う。

「光の弟か」

「はい」

「で、一緒に真選組をぶっ壊してえと」

貴寄光の弟、真選組の隊服…。たったそれだけのキーワードで自分が訪ねてきた訳を言い当てられて、猛は大きく目を見開いた。

「は、はい。駄目ですか？」

街で聞き込みをするのに便利だから、わざわざ隊服で来た。

指名手配犯を捕らえに来た、と思われるも仕方ないのに自分はそんなに飢えた目をしていたのだろうか。

「真選組の現役隊士…使えるんじゃないですか？」

背後、部屋の入口。急に聞こえた声に猛が肩をびくりと揺らすと、

さらに声、声。

いつの間にか背後には男女あわせて三人が立っていた。

「怪しいッス！きつと真選組の作戦ッスよ！」

わめく女、あれは“紅い弾丸”来島また子。

始めに言葉を発したのは“変人謀略家”武市変平太。
そして…

「にしちゃあお粗末だな。どう思う万斉」

「ふむ…。リズムはまあまあだな」

高杉の問いによく分からない答えを出したのは“人斬り”と言われ
る河上万斉だ。

ずらりと並ぶ鬼兵隊の幹部たち…。猛の緊張が高まる。

高杉は、ククツと鼻を鳴らして猛に向き直る。

「まア、ここまで来れたことは褒めてやるよ」

はぐらかされてたまるものか。

猛は突き放すように言う高杉にも食い下らない。

「俺、本気です！剣術だって結構…「だったら近藤を殺して来い」」

重ねられた高杉の声はあまりに冷酷で…。

「えっ…」

猛は一瞬固まってしまふ。

今、何て言われた？

高杉は猛の様子を嘲笑うように言う。

「俺たちが壊してえのは真選組なんてちっぽけなモンじゃねえ。奴らは足掛かりにすぎない」

「幕府、ですか？それだったら俺も…」

怯みながらも猛が言う。だが、高杉は、違っ、と首を振った。

「違えな。壊すのは、この世界丸ごとだ」

「！」

世界、を…。

「だから近藤の首“ぐらい”取ってこい」

「……………」

高杉の声が、猛の頭にガンガンと響く。

近藤勲…憎き、敵の大将。

変態だけど、腕っ節は本物。それに、そんなに嫌な奴じゃなかったんだ。

潰す、と言ったなら殺す（それ）もひとつの選択肢。

人を、話したことがある人を、殺す…。自分にできるだろうか？

世界を壊す…。

そこまで望んでいた？

じいちゃんに、お絹、兄貴と行った思い出の場所…。

世界、世界、壊、す…。

猛はふらりふらりと部屋から出ていった。

「いきなり厳しすぎやせんか」

ふらふらと覚束ない足どりで帰っていく猛を見遣りながら、万斉が
呟く。

続いて、他のふたりも話します。

「近藤は局長だけあってなかなかのやり手ですからねえ」

「まあ先輩は下っ端隊士にも勝てないツスけどね」

「私は頭脳派ですから」

普通なら怒るところだが、武市はポーカーフェイスのままさらりと
かわす。

そんないつものやり取りを尻目に万斉がまた呟いた。

「結局は体よく追いついたというわけでごさるな」

「ククッ…それで万にひとつ奴が近藤の首を持ち帰ればラッキーじ
やねえか」

と、ここで武市が思い出したように晋助を向く。

「あ、晋助殿、報告があつたんでした」

「何だ」

「桂小太郎…彼がこの京に来ているようですよ」

「ヅラ？何しにだ」

突然出てきた旧知の男の名に、高杉は怪訝そうに目だけを武市に向ける。

武市は、こほん、と咳ばらいをひとつ、先を続けた。

「噂では朝廷側と組むんだとか。少々厄介ですね」

「…天皇？今さらしゃしゃり出て来るか。まアヅラのことだ。多分協力を迫られ断りにでも来たんだろうよ」

返事までに微妙に空いた間^ま…。

武市は少し気になりつつもさらに返した。

「朝廷の誘いは簡単には断れないでしょうねえ」

武市の言葉が終わるか終わらないかのうち、晋助が立ち上がり自らの肩に羽織りをかける。

「あ、晋助様、どこ行くツスカ？」

「ちょっと…夜風に当たってくる」

なにか不安げに尋ねるまた子に背中そのまま返事をし、晋助はひとり部屋を出ていった。

男前

「いいの？勝手に動いて。怒られるよ」

「だってあんなの理不尽アル！しかもなんか銀ちゃん変だったネ」

あれから予約していた宿に一度は帰った新八と神楽だったが、日が傾いても帰って来ない銀時たちに痺れをきらせて、ついに動いた。

銀時を言われるまま行かせてやった時は男前だと思ったのに。

新八は苦笑しつつも、神楽に同意を示す。

「確かにさっきは変だったよね。いや、ここに来てから何かどっか上の空だったな…」

京に来てからというもの…銀時はどこかそわそわと周りを気にして、特に神楽をたまに注意深く見ていた気がする。

「どーせまた水臭いこと考えてるに決まってるネ」

「ごちゃごちゃ考えていた新八だったが神楽に、ふん、と鼻を鳴らして言われ、だろうね、と一言、考えるのをやめた。」

随分前に別れたから前方にはもちろん銀時たちの姿なんて見えない

が、行き先は分かっている。

いつの間にか日も暮れ、行き交う人々も疎らになった街を何となく
尾行チックに隠れながら進む。

と、前方に見覚えのある、だけど京に来てからは見るはずのない黒
い隊服が見えた。

「…あれ？あの子…」

隊服の主にも、見覚えがあった。

そう、あれは確か数日前万事屋を訪ねて来た…。

「あーこないだ銀ちゃんが連れてきた男の娘！」
おんなのこ

神楽がその答えを放つ。

そうだ。確か銀時の昔の知り合いの弟、猛君、だったか。

神楽の言葉通り、確かに彼は女の子みたいな顔つきをしていた。

「神楽ちゃん、失礼だよ。でもなんで京都に？」

「きつと真選組が嫌になってランデブーアル」

「ランデブーって…でも何か思い詰めた表情してるね。しかも随分
立派なところから出てきたなあ」

猛が出てきたのは自分たちが泊まる宿とはレベルが違うのが一目で分かる、高級そうな旅館。

事件のにおい…。

神楽が心なしか楽しそうに言う。

「ちょっと行ってみるネ」

「え？銀さん追うんじゃないの？」

「うるさいネ。お前だって気になるダロ」

「まあ、ね」

この遠い土地で見えるはずのない隊服、おそらく単独、立派な旅館…。

確かに事件のにおいプンプンだ。

正直、気になる。

少し迷ったが、新八も着いていくことに決めた。

「あつ！待って！誰か出てきた！」

さて行こう、そう思った時、目標の旅館からまたひとつ人影が出て

くる。

「「！」「」

ぶらりと姿を現したのは派手な羽織りを肩に掛け、片目を包帯に覆われた男…。

「あ、あれは確か…高杉、さん…。まさか、真選組とテロリストが…？」

急いで物陰に隠れ、息をひそめる。

高杉はなんとも形容し難い独特のオーラを纏い、先程猛が進んだ方とは逆の方向に歩いていった。

「追うネ」

神楽は、ぐつ、と傘を握り締めて高杉の行った道を睨む。

「え、だ、大丈夫かな？」

「情けない声出すなダメガネ。なんかあったら逃がしてやるから安心するヨロシ」

「…っ！」

一言残してすぐに背中を向けてさっさと行ってしまふ神楽に、やっぱり男前さを感じる新八なのだった。

男前（後書き）

男前な神楽ちゃんが好きです。

お決まりの台詞

大きな月の光に照らされて、赤黒い液体がてらてらと光る。

自らの体から流れるそれをぼんやりと見遣り、先程から執拗に下りようとしてくる瞼に抵抗することをやめる。

そのまま心地好い暗闇に包まれていたい、そう思っていたのにそれは頭上からの声に遮られた。

「よオツラ。また死んだふりか？」

開いた目に派手な着物が映り視線を上げると、見知った右目がこちらを見下ろしている。

「…うたた寝だ」

壁に全体重を預けた格好に情けなさを感じたのか目を逸らし答える桂を見下ろし、高杉はくつくつと喉を鳴らした。

「お決まりの台詞はどうした？…相当余裕がねえらしい」

「うるさい。何をしに来た？」

不機嫌そうに言う桂の様子を楽しむように、高杉は口端を持ち上げ

る。

「近くで面白えイベントがあるってえから見物に来たのさ。残念ながらもう終っちまったようだが」

「フン…そういえば京はお前の潜伏場所だったか」

「まアな」

自分から話しかけておいて黙ってしまった高杉に、今度は桂が話をふる。

「彰治殿の弟…孝暗殿の勢力が動いているらしい」

「興味ねえな」

ずっと京にいたのだ。

この目ざとい男が天皇家のゴタゴタに気が付かないはずはないし、国を混乱させるこの事態に興味がないはずもない。

桂は苦笑し、続けた。

「俺を引き込んで倒幕を目論み、成功してもしなくても全て俺たち“攘夷浪士”に罪をなすりつける魂胆だろう」

「もともと咎人だろう。関係ねえんじゃねえか？」

にやりと笑う高杉に桂も、まあな、と笑い返す。

そのまままたしばらく黙ると、ふいに高杉が小さく呟いた。

「弟、か…」

「？」

「今日…光の弟が訪ねて来たぜ」

「！…仲間に引き入れる気か？」

「適当にあしらった。ああいう真面目くさい奴は足手まといになる。てめえしかり、な」

高杉はそう告げると馬鹿にしたようにまた笑う。
そして桂もまた、高杉の真意を見透かすように笑ってみせた。

「…お前は変なところで優しいからな」

「殺すぞ。いや、勝手に死ぬか」

気分を害したのか、高杉は桂の言葉を一蹴して踵を返す。

相変わらずこいつは、たまに子どもっぽい。

桂は、ふっ、と笑うと本当に自分をおいて行ってしまう高杉を少し焦りつつ呼び止める。

「おい高杉くん。せめて誰か呼んできてくれない?」

「…チヨロチヨロついて来た後ろのガキどもに助けてもらえ」

高杉は桂を振り返らずに答える。

「えっ?」

言われて桂も周辺に注意を向けると、確かに物陰に見知った気配が垣間見えた。

知っていて後をつけさせたのだろうか。
こいつの考えることはよく分からない。

「じゃあな。ツラ」

高杉は結局そのまま振り返らずにさっさと行ってしまった。

桂は去っていく背中に、今度ははっきりとお決まりの台詞を呟いた。

「…ツラじゃない、桂だ」

おいていかれる者の声

高杉が去ってしばらくして、物陰に隠れていた子どもたちが姿を現す。

「あゝ怖かった。まさか気付いてたなんて」

新八が額の冷や汗を拭いながら言うと、神楽は呆れて言う。

「途中から物凄い殺気飛ばされてたネ。気付かなかったアルか？」

「全然…」

「おめでたい奴ネ。そのメガネは飾リアルか？」

腐っても戦闘部族、夜兎族の神楽の研ぎ澄まされた感覚と自分の感覚に差が生じることは重々承知していたが、ふふん、と鼻で笑う神楽に少々カチンときて、新八が顔をしかめる。

「いつもメガネが本体とか言ってるくせに。それにメガネで気なんて見えないよ」

「ん？本体が…飾り？じゃ、じゃあ新八はいつたいどこにいるネ！？」

「ここオオオ！メガネの下っ！」

わざとなのか素直なのか、神楽がボケて新八が突っ込む。
そんないつものコントを黙って見ていた桂が口を開く。

「おぬしらがいるということは…銀時も来ているのか？」

失礼なことにすっかり忘れていた桂の存在を思い出し、新八は冷静さを取り戻して問いに答えた。

「はい。僕らエリザベスさんに頼まれて…」

「エリザベスに…？」

「そうアル。ヅラが急にいなくなるからエリー、心配してたネ」

「そう、か…」

桂はばつが悪そうに呟くと、すっと俯いてしまった。いつもより元気がないのは傷のせいか、それとも…。

「ところでこの怪我、例の朝廷の人たちに？」

新八が尋ねると、桂は情けなく笑って言う。

「…ああ。協力を断ったからな。一通り倒して撒いてきた。あ、あとヅラじゃない桂だ」

「遅っ」

ワテンボずれたお決まりの台詞に突っ込む新八。
その後ろから、ぽつりと小さな呟きが聞こえた。

「撒いてもその先で死んだら意味ないアル」

呟く声は怒りを帯び、そして少し震えていて…。

「……………」

「お前らはいつもそうネ。巻き込みたくない、とか勝手なこと言っ
て私たちをのけものにするアル」

「神楽ちゃん…」

あちこちに傷をつくって動けないでいる桂に乱暴に、不格好にハン
カチで応急処置を施しながら話す神楽を目にして新八もかける言葉
を失う。

いくら男前に送り出したって、きっと神楽はいつでも銀時たちを心
配しているのだ。

父にも、兄にもおいて行かれた彼女だからこそ。

「いつも散々迷惑行為しといて、肝心なところで格好つけて巻き込ま

れないなんて、その方がハラ立つネ」

神楽は、おわりっ、と応急処置の完了した傷口を叩くと立ち上がる。桂は痛みでちよっと顔を歪めてすまなさそうに神楽を見上げた。

「…悪かった」

「謝るならエリーにナ」

神楽はちよっとむくれながらも、足どりの覚束ない桂に無言で肩を差し出す。

慌ててその反対側を支えて新八はしみじみと言った。

「神楽ちゃん、相変わらず格好いいよね」

感動の再会？

どこかであたばっているんじゃないか、そう思って帰る道すがらになくなった長髪を捜していたのに。

諦めて宿に帰ると、そこ、ベッドの上に下手くそに巻かれた包帯だらけの長髪がいた。

「あ、銀時くん。おつかえり〜」

「…何でいんの？」

ホッとする前にイラッとして、銀時が尋ねる。

「ん？実はかくかくしかじか…」

「……………」

「……………」

「…というわけだ」

「分っかんねえよ！！なに漫画の卑怯な手法使ってるの！？もっかい書くの面倒臭いからってなに八文字で片付く魔法の言葉使ってる！？」

「ポポポポ〜ン！」

「うるせえ!!」

こっちは心配してやったのに。

悠長にボケをかます桂に銀時のイライラがピークになろうとした時、部屋奥から救急箱を持った新八と、それを手伝う（邪魔する？）神楽が現れた。

「桂さんが追っ手から逃げてるところで偶然会ったんですよ」

「というか片目追いかけてたらロン毛見つけたネ」

「え？どうしよう全然意味分かんない」

意味不明な神楽の解説に銀時が眉を寄せていると、その後ろからひよっこりと白い塊が姿を見せた。

【桂さん…】

「!…エリザベス、捜しにきてくれたのだな」

桂は先程とは打って変わって真剣な表情をつくる。

エリザベスの不安そうな顔―桂にしか分からないが―を見て、先刻神楽に言われたことを思い出す。

「すまなかった」

ずっと頭を下げる桂にエリザベスは呆れたように微笑む―これも桂にしか分らないが―。

【今度は一緒に連れてって下さいね】

「ああ」

はいはい、よかったよかった。

完全にふたりの世界に入る桂とエリザベスに、新八と神楽は生暖かい視線を、銀時は若干不快そうに眉間にシワを寄せた。

「感動の再会みたいな空気につけてるけど絵ヅラがあれだよね」

「ヅラじゃない桂だ！」

……。

突っ込む気力も失せて、銀時はため息混じりに桂に尋ねた。

「……んで？今までどーしてたワケ？」

「ああ……。俺が、妙な男に協力を仰がれたのは聞いたな？」

「おー」

今度はちゃんと話をする気になったらしい。

桂は崩した姿勢を改めてこちらを向いた。

「そいつの素性を調べるために京に来た。いや、もうほとんど分かっていたのだから」

「何でエリーおいてったアルか」

「今の段階で朝廷を敵に回すのは厄介だ。それに、京都は…」

「？」

エリザベスは天人…。

京に連れて来れば、貴族連中からどういう扱いを受けるかは目に見えていた。

たとえエリザベスが承知の上だったとしても、貴族の冷たい視線にエリザベスを晒すのは嫌だった。

神楽と新八は口ごもる桂を不思議そうに見ていたが、やがて諦めた新八が新たに尋ねた。

「朝廷ってそんなにヤバいんですか？」

「ん？ああ、貴族だけあつていい武器を持っているのもそうだが…一番恐ろしいのは兵たちの盲信的な姿勢だ」

桂は顔を上げ、また話し出す。

「天皇が神とされてきた時代の考えを現代も引きずっている連中は未だにいる。連中の恐ろしさは、主^{あるじ}への狂気に満ちるほどの忠誠心にあるんだ。奴らは主がためなら命さえ簡単に捨て去る」

「恐ろしいよね」

ごくり、と生唾を飲み込む新八とよく分かっていない様子の神楽をよそに気の抜けた返事をする銀時を桂は薄く睨み、ため息混じりに言った。

「だがまあ、俺を追いかけて回してたのは正確には天皇の使者じゃない。天皇の弟勢力だ」

「弟？」

「どうやら次期天皇を狙っているらしくてな。元々現天皇は穩健派、弟勢力は過激派、みたいに言われていたから、盲信的な連中なんかは弟側に集まるわけだ」

雅で悠然と見えた京の中心地で、まさかそんなドロドロした事態が起きていたなんて…。

エロエロかどうかはともかく、子どもには見せたくない光景だ。

もしかしたら銀時はそんなことを思って自分たちを遠ざけたのかも
しれない。

新八が、微妙に合っているが正解ではない推測をしていると、銀時が思い出したように、あ、と零した。

「そーいえば俺、彰治クンに会ってきたよ」

新八と神楽が、きょとんと目を見開く。

一方は驚き、一方は疑問から、だ。

「彰治、君!？」

「誰アル？」

「天皇陛下の名前だよ!し、知り合いなんですか?同姓同名ですよね...?」

わたたと焦り聞き返す新八を横目で見ながら、銀時は何でもないことのように軽く返す。

「うん?天皇だよ。ちょっとした知り合いなの」

「えええ!?!天皇陛下と、アンタらが!?!どいう知り合いなんですか!?!」

掴みかかる勢いの新八に、銀時は面倒そうに眉を寄せた。

「あゝもゝめんどいウゼー死ね」

「喚くなうるさいネ」

「メガネ」

【童貞】

「えっ僕何でこんな責められてんの？普通に驚くところだよね？てゆーか最後のふたりただの悪口！」

便乗犯三人に思い切りつつこむ新八だったが、悲しいかな、それをも面倒そうに銀時にさらりと流された。

「まゝとりあえず気をつけろって言うてきた。俺らにもできる限りは危害が及ばねえようにしてくれるってさ」

「そうか…。だがまあ、いくら彰治殿でもあの弟を完全に止めるのは無理…！」

桂が急に言葉を詰まらせ、他四人も一斉に部屋の入口に目をやる。

いつの間にか開け放たれた扉からは目を血走らせた男が1、2、3…7人。

「ありやりや。早速止められてねえよ。てゆーかお前つけられてたんじゃない」

「はて。フラフラしてたから分かんない」

確かにまあまあ傷を負っている桂を見遣り、銀時がため息をつく。

「しゃーねえな。じゃあ、右端から銀さん2、神楽2、エリザベス2、ツラ1、新八が√2な」

「何！？ルート2って！？普通に桂さんの代わりすればいいんじゃないんですか！？僕、怪我人より役に立ちませんか！」

新八の叫びはまたしても流されて、各々武器を構える。

「いくアル！」

【了解】

「一人なら何とかなろう」

「いや、僕どうすれば…っ！」

「√って計算の時邪魔だよな」

「僕邪魔ってかアアア！？」

新八の叫びがこだまする中、武器を構えたそれぞれは敵味方互いに

目の前の相手に向かって駆け出したのだった。

魅力的な手駒

自分と違って目をぎらつかせた男たち。

違った意味で光を映さない、死んだ目をしているそいつら。

殴っても蹴っても捨て身で向かってくるから気味が悪い。

「こいつら…ゾンビみたいネ！」ドドド

「怖いこと言うな馬鹿！淡々と倒せ！」ドカツ

「奴らには命令しか見えていないのさ」ザシュッ

【プラカードが何枚あっても足りないぜ】バキッ

「……………」チーン

・
・
・

【ふう、片付いた】

「いい仕事したなあ」

「ぱつつあん、何やってんの？」

「ひとりだけ観戦モードアルか？役立たずが」

「あんたらが僕に仕事与えてくれなかったんでしょオオオ！」

「新八、仕事つてのは与えられるモンじゃねえ。自分で見つけるモンなんだよ」

「そうアルこのゆとりが」

「正しいこと言ってるけどム力つくっ！」

やりにくい相手ではあったが、彼らの敵ではなかった。

各々の方法で男たちの動きを止めると、いつものようにふざけ合いが始まる。

ぎゃあぎゃあと言い合いを繰り返していると、折り重なって倒れる男たちの向こう側から声が飛んだ。

「やはりお強くていらっしゃる」

「お前っ！」

部屋の入口には、扇子で口元を隠した色白で端正な顔の少年。

驚いた様子の銀時と桂に、少年は親しげに笑う。

「お久しぶりですねえ」

「誰、ですか？」

まだ十四、五…自分や神楽とそんなに変わらないであろう年頃の割に、怪しい空気を纏う少年らしくない少年に戸惑いながら、新八が尋ねる。

「天皇の弟君…孝暗殿だ」

桂が苦い顔で答える。

これが…。

この少年が折り重なる男たちにとっての絶対的な存在で“神”なんだ。

そう思えば少年の纏う怪しげな空気も頷ける気がした。

孝暗は、にやりと笑って、自身を睨みつける桂を見遣る。

「桂君、ごきげんよう。よく生きていたねえ。ますます協力してほしくなりましたよお。考え直さないかい？」

「断る。そもそもぬし、俺たちを毛嫌いしていただろう」

「嫌いだねえ。でも手駒としては魅力的だあ」

孝暗の話し方は何だか間延びしていて、嫌らしく、不快感を煽る。桂はもう一度眉間にシワを作って孝暗を睨むと、きつぱりと告げた。

「そんなものになるつもりはない」

「ふふ…残念。兄上様になら協力したあ？」

「いや。誰であつても同じだ」

孝暗は一度桂を蔑むように睨みまた笑って、今度は銀時を向く。

「坂田君も、かなあ？」

「俺は面倒臭えのは嫌いだ」

敵意剥き出しで睨む桂とは違い、けだるそうな、でも不快感の見え隠れする様子で目を逸らす銀時に、孝暗は、ふん、と鼻を鳴らすと、くるりと背中を向けた。

「…まあ、いいやあ。この度は失礼するよあ。だけど僕はとってもしつこいから。気をつけてねえ」

どこから涌いたのか、たくさんの男たちに囲まれ、孝暗はそのまま

部屋を出ていつてしまった。

出ていく異様な集団を見遣りながら、桂は大きくため息をついた。

「これ以上京にいるのは危険だな」

銀時もいかにも嫌そうに、桂に向けてため息を吐く。

「もー…これ俺らまで目え付けられたんじゃない？」

「最悪アルゝ巻き込むなヨ」

「神楽ちゃんさっきと言ってること違う…」

新八の呆れたようなつつこみの後もぐちぐちと文句を言う銀時と神楽だったが、桂は聞いているのか聞いていないのかさりとそれを聞き流して、勝手に話題を変えた。

「ああ、そうだ。弟といえば高杉が…光の弟に会ったと言っておった」

「あ、私たちも見たネ」

別に本気の愚痴だった訳ではないらしく、ぴたりとぐちぐちをやめ

て神樂が答える。

そつえば、高杉を追う前は猛を追おうとしていたんだっけ。

新八も思い出し、ああ、と零す。

「あゝ。俺がフツちゃったから高杉んとこ行ったわけだ」

けだるげに言う銀時を、桂は驚いたように見遣る。

そつだ。確かに銀時は数日前急に貴寄の話を持ち出してきた。

「…何？お前も会ったのか？」

桂が目を見開いて尋ねると、銀時は逆に面倒そうに目を細めた。

「まアな。真選組潰すんだと」

やめとけて言ったら幻滅された、と銀時はからからと笑う。

桂は、お前らしいな、と笑い、すぐに腑に落ちない表情を作った。

「何故俺を飛ばして高杉なんだ…？」

同じ江戸にいたはずの自分はスルーして、わざわざ遠方の高杉…。

あ、あれだ。俺の潜伏が巧みすぎてきつと見つけれなかったんだ、うん。

桂が自分を慰めるようにぶつぶつ独り言を言っている様子を、銀時は哀れそうに見て、やっぱりけだるげに言った。

「さア。生理的にアレなんじゃね？」

！！

その夜、桂がいじけていつも以上にウザくなったことは言うまでもない。

いつかの気配

「攘夷志士、ねえ…」

ふう、と土方は煙草の煙を吐き出す。

病院から帰ってきた次の日、タイミングよく武州に出張していた山崎も帰ってきて、早速出張の報告会が始まった。

「はい…調べてみると彼の兄、貴奇光は終戦後捕らえられ晒し首になつてゐたいです」

「…そりゃあ恨みまさア」

ちやつかりと傍にいた沖田も報告会に参加し、口を挟む。

「仕方ねえだろ。そういう時代だ」

土方は話を割った沖田を軽く睨み、山崎に先を促した。

「ええと、で、貴奇の家に立ち寄ったんですが…」

「何か見つけたのか？」

「いえ。驚くほど何にもなくて。なんでもご両親が亡くなってから貴奇が家の中のもの全て処分してしまつたらしいです」

山崎の表情から予想していなかった訳ではないが、これ以上の情報はなさそうだと判断して土方は、はぁ、と息をついた。

「調べられることを想定してたのかもな」

「で？その貴寄はどこにいるんでイ。最近見かけねえな」

沖田がきょろりと周辺を見渡す。

「あ？俺は知らんぞ。昨日帰ってきたところだからな」

「俺も出張行ってたんで」

「俺ア暴政を奮ってたんで…えーとじゃあ間を取って土方さんが悪い、でいきやしょう」

「てめえだよっ！」

土方が怒号を飛ばすも、沖田は悪びれる様子もない。

「そーいや花井と瀬戸も真剣に見てねえや。ま、さすがにひとりで三人も見張るのはキツイでさア」

「一人として見張れてねえだろ！…んで？近藤さんは？」

もういい。コイツに頼んだのが間違いだった。

土方はため息をついて尋ねる。

サボってばかりのコイツも、近藤さんのことなら…。

「あア。なんか初めはベタベタついて来て鬱陶しかったんですが…最近またストーカー業務に戻りやした。俺もちゃんと見てねえや」

「お前らの危機感は戦隊モノのヒロイン並か！」

淡い期待も打ち砕かれて、土方は盛大につっこむ。

「大丈夫ですよ。近藤さんはあれで強いし、俺も組織より自分が大事だから深追いはしやせん。どっかの土方^{マスケ}みたいに。（あとつっこみよく分かんねエ死ね土方）」

「アホか！てめえはどうでもいいが近藤さんは仲間には甘え！伊東の時代がいい例だろ（アレだよ。戦隊モノのヒロインって何回さらわれんのってくらい危機感ねえじゃん）」

「追いかけてるお人が“アレ”だから大丈夫でしょう」

沖田の言葉に、土方が一瞬考える。

近藤さんが追いかけてる女…。近藤さんを護ってくれるかはともかく、確かに近くには寄りたくない女だ。

「ああ…女ゴリラ護衛につけてるようなモン…」サクッ

「副長オオオ!?」

土方が失礼なことを口にした時、言い切る前に頭に薙刀が刺さる。
薙刀が飛んできた先にあったのは、悪魔のような笑顔と…。

「誰がゴリラだコラ」

「あ、あああ姐御オ!」

「ねえゴリラってどこ?この汚いゴリラかしら?」

どす黒い笑みを浮かべながら、女ゴリ…お妙は後ろ手に引きずって
いた“それ”をどさりとこちらに投げ捨てる。

「お、妙さん…」

「局長…」

情けなく(でもなんか笑顔で)転がる“それ”はゴリラ改めこの真
選組の頭…。

今日も盛大にボコられたらしい。

「あんたが屯所^{ちんじょ}まで来るなんて珍しいな?」

何とか立ち上がった土方が痛みを紛らわすため煙草に火を点けながら問う。

「このゴリラがあんまりにもしつこいから。駄目よ。ペットはちゃんと繋いどかないと」

お妙は買い物帰りらしく、その手にスーパーの袋を持っている。袋に印字されたスーパーの名前はお妙の家のほど近く。

と、いうことはそのスーパーとは正反対のこの真選組屯所にわざわざ立ち寄ったということだ。

「お妙さ〜ん！僕は貴女と繋がりたいですっ！」

「きゃあ！このゴリラ吠えるわ！」

幾分か回復した近藤は、馬鹿なことを叫んだせいでお妙に踏み付けられ、また白目を剥いて昇天した。

「土方さん」

事を終えて立ち去ろうとしたお妙が立ち止まり振り返る。

土方は一瞬身じろぎしながらも、何だ、と答えた。

「その人、本当に繋いでおいた方がいいかもしれませんよ」

「…どういうことだ？」

「そのままの意味です。何だか知らないけれど、これ以上ストーカーが増えるのはごめんですから」

ストーカーが、増える…？

「「「！」「」」」

屯所の入口…小さな影が、さっと動いた。

お妙は影を薄く睨んだ後、それじゃ、と一言、屯所を後にした。

「ホラな。やっぱり危ねえ…どうした総悟？」

咎めるように言った言葉をどこか上の空で、ヘイ、と返す沖田に、土方は怪訝な顔を向ける。

「この気配…」

「？」

「いや…。何でもありません」

どうせまたいらぬ事を考えていたのだろうと、土方はそのまま黙り込んだ沖田に見切りをつけて、伸びている近藤を部屋に運ぶ。

沖田は先程の影のいた所を睨み、いつか感じた気配を思い出して呟いた。

「またてめえか？貴寄…」

いつかの気配（後書き）

私も少し絵を描いてみました。オリキャラのイメージです。下手だから皆さんの妄想力で補完してください。

貴寄

> i 3 6 4 8 6
— 4 5 7 4 <

一色

> i 3 6 4 8 4
— 4 5 7 4 <

花井

> i 3 6 4 8 7
— 4 5 7 4 <

瀬戸

> i 3 6 4 8 3
— 4 5 7 4 <

セピアにするとちょっとアラが隠れる…気がする。

煽り（前書き）

猛が動き出します。

煽り

「ヒマだ」

手当ても済んだしもう一度お妙さんに会いに…そう思って出かけようとしたらキレ気味の土方に、頼むからしばらくじっとしてて、と言われて、近藤は途方に暮れていた。

「いつも何してたっけ…」

今日の巡回当番は夜。

来客もなし。

書類関係は土方がやっているし、おまけに街で捕物があったとかでほとんどの隊士たちが出払っている。

「トシに仕事でも貰いに行くか」

別に上司のプライドもへったくれない近藤は部下に仕事を貰いに行くため、よいしょと立ち上がった。

「局長」

部屋を出たところで、不意に声をかけられた。

「ん？君は確か…六番隊の貴寄君だったか。どうした？」

あまり言葉を交わしたことはないはずだが、さすが局長だけあって新顔の所属と名前位はしっかり覚えていいるらしい。

にこにこと笑う近藤に、猛も笑い返して会釈した。

「はい。あの…稽古、つけてくれませんか？」

「稽古？仕事は終わったのか？」

「あ、今日非番なんです」

猛は、すつと自身を指差す。隊服ではなく、着流し姿だ。

近藤は、ほう、と唸ると感心したように言った。

「そうか。熱心だなあ。いいぞ。道場の鍵取ってくるから先行ってくれ」

「ありがとうございます」

近藤は、ぼん、と猛の肩を叩くと鍵のある事務室へと向かった。

――

「さあ、かかってこい！」

今日は稽古の予定がなかったもので、ただっ広い道場は静かだった。

やけに声の響くそこで、近藤は上着を脱ぎ、竹刀を構える。

「…いきます！」

猛も竹刀をぐつと構え、近藤に飛び掛かる。

パシ、パシ、パシ、

濁いた音が道場に響く。

近藤は簡単に避けることも出来そうな猛の竹刀をひとつひとつ丁寧に受け止めてやる。

「お、お、なかなかやるなア」

少し強い当たりがあつて、近藤が一步後ずさる。

と…

「もう少し脇を閉め…っっ！？」

バキッ、とでかい音がして足元が不安定になる。
宙に浮く感覚に襲われる。

落ちつつ…る？

自分のおかれている状況に気が付くまで数秒…。

どうやら道場の床が抜けたらしい。
床下、地面に直接足がついて、床から首だけが出ている状況だ。

こりゃ動けない。
そう思って見上げると、頭上数センチ、勢いを殺しきれない猛の竹
刀が…。

「！」

バキッ

一段と大きな音が、道場に響いた。

｜・｜・｜・｜・

「あれ？近藤さんは？」

局長の決済を仰ぐ必要のある――というかただハンコをもらっただけで実際は自分が処理している――書類を持参した土方は、空の局長室からの前で独り言を漏らす。

「ああ、局長ならさっき道場に向かいましたよ」

返事をしたのは、たまたま通りがかった、ひとりの隊士。

「道場？」

今日、道場を使う予定なんかあったか？

土方が怪訝そうに眉を寄せると、隊士はそれに答えるように言った。

「何か非番の隊士が稽古を頼んだみたいで。確かあの……六番隊の……」

六番隊、だと……？

土方がぴくりと反応する。

「貴寄か！？」

「あ、そうですそうです、て副長？」

返事を聞くやいなや、土方はそこから駆け出した。

驚き呼び止める隊士の声になんて耳を貸さずに道場へ急ぐ。

貴奇は今日非番なんかじゃない。

あのがき、近藤さんに何する気だ…っ！

全速力で走り、乱れた息を整えることもせず目の前、道場の木戸を乱暴に開ける。

「近藤さ…っ！」

「あれ？トシ。どうした？血相変えて」

名前を呼ばれたその人は、呑気に笑ってこちらを向いた。

「足…どうした？」

道場の真ん中に座り込んだ近藤の足には、くるくると包帯が巻かれている。

そしてその傍らには、救急箱を手と同じく座り込む猛がいた。猛が、怪我をした近藤を手当てした格好だ。

近藤は苦笑いをして土方に答える。

「いやあ、あの穴にハマってな。ちよつと擦りむいた。道場も老朽化してるんだなあ」

近藤が笑いながら指差した先には、床に空いた大きな穴があった。その数センチ横には、力任せに叩き付けられたであろう竹刀がぶつ刺さっている。

「すみません。僕が稽古なんて頼んだから…」

「いやいや。俺こそすまん。大層に手当てまでしてもらっちゃって」

和やかに笑い合う近藤と猛を交互に見て、土方は呆れたようにため息をついた。

「…貴寄、ちよつといいか」

「…はい」

―・―・―・―・―・

裏庭をしばらく歩いて人気のない場所に着くと、ここらでいいかと土方が口を開いた。

「お前、今日非番じゃねえだろ」

ただ黙って着いてきていた猛が、土方の鋭い視線に一步後ずさる。

「すみません。仕事が早く終わったので、どうしても局長に稽古をつけて欲しくて」

猛は俯いて目を逸らしながらもしっかりと答える。

「身動き取れねえ相手に、床に突き刺さるくらいの力で竹刀振り下ろすのが稽古か？」

やっぱり目ざといな…。

猛は悔しくて唇を噛むと、それが土方にバレないようにさらに俯いた。

「局長がお強いので、つい…ムキになっちゃいました」

「すんでのところでビビったか」

「おっしやる意味が分からないです」

顔を上げ、睨むような強い眼差しを向ける猛を、土方はさらに挑発する。

「総悟の次は近藤さんか？」

「ファンですよ。沖田隊長、局長、それに副長も」

だんだんと落ち着きを取り戻したのかはつきりと言う猛を睨み、しばらくして土方は、フン、と鼻で笑った。

「……とりあえず公務時間中に勝手な行動をしたことについて、反省文だ」

「分かりました」

――。――。――。

猛と別れ、いつもの如く部屋でサボる沖田をたたき起こす。

沖田はサボりが見つかったても罪悪感なんて持つはずもなく、逆に起こされて不機嫌そうに土方を睨んだ。

「総悟、今日近藤さんと夜の巡回当番だな？」

「そうですね」

起きがけでぼんやりと目を擦りながら答える沖田に呆れつつも、土方は続けた。

「しっかり近藤さん見張つとけ。ちょっと貴寄を煽ってつきた」

それはつまり貴寄のヤローが巡回中に襲ってくるかもしれないってことで。

沖田は面倒そうに顔をしかめた。

「自分は屯所持機だからって危ないことしないで下せエ死ね土方」

「…コソコソされるより分かりやすいだろ。山崎にも直接貴寄を見張らせるから何かあったらすぐ呼べ」

沖田の態度に土方は若干眉を吊り上げたが、頼み事をしている以上は仕方ない。…というか上司が部下に仕事を言い渡すのは普通のことなのだが。

まあ、怒るのはやめておいた。

「へい」

命じられた沖田は珍しく言い返して来ない土方を横目で見て、氣のない返事で手をはためかせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2718x/>

裏切りの剣

2011年12月7日00時55分発行